

川柳塔

昭和五十六年三月二十五日 創刊
昭和五十六年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六四七号



日川協加盟

No. 647

四月号

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・土六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴
南海難波駅構内店



大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

十千・十二支

今年は辛酉の歳といつて、ただのトリ年でなく、「辛酉」に革命あり。とされて60年目に還つて来る。昔から恐れられる歳だそうなる。最近では大正10年がこれに当る。知らぬなら知らぬで、知らぬが仏。考えてみると大正10年といえば私など大学の二年生。親の脛齧りの最中で、いともおだやかな記憶しかない。この道の専門の学者である安居香山教授の言を借りると「予言の当否そのものを問題にするよりも、そうした予言に耳を傾けるだけの

心のゆとりを、より望ましい。吉にしろ凶にしろ、これを生活指針の一つとし、反省の素材として生かすとき、予言も亦人生のよき伴侶となる」とある。一方の説では、十二支というのはもともと一から十二まで天界を区切るための符号に過ぎず、鼠や牛などの動物を連想させてさまざまな迷信を産み出したとも云う。それはそうと人間生活に大変身近かな猫はなぜ含まれていないかとの理由は不確かな由。

意地つ張り孤独を眼鏡の裏に伏せ
梅から桜運命線も騒ぎ出し
セーターに妙な色気が出る女
老犬の卑怯かも知れぬ孤に耐える
孫娘の成人式を祝す
成人式祖母との密約撮される

中島生々庵

川柳塔四月号

座右の句

世相どう変りゆくとも円い月

(好郎)

私の句

風雪の重さに耐えた竹の節

中村 優

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

十千・十二支

由加山川柳句碑の径

■川柳太平記 35 石部金吉の魚屋五世

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (一丁)

川柳塔 (同人作品)

水煙抄

秀句鑑賞 [同人吟
水煙抄]

■川柳塔15周年記念特集 先人抄―句集「私達」より②

愛染帖

春のさががけ大萬フアミリーの祭典

追悼 戸田古方先生

中島生々庵 …… (1)

本田恵二朗 …… (2)

東野 大八 …… (24)

西尾 栞選 …… (26)

正本水客選 …… (4)

山根白星選 …… (32)

大矢十郎選 …… (23)

橋高薫風選 …… (43)

橋高薫風選 …… (28)

橋高薫風 …… (40)

神谷凡九郎 …… (44)

由加山川柳句碑の径

本田恵二朗

国立公園由加山は児島半島中部にある海拔二百米の高原。ここに由加大権現があり、別格本山蓮台寺がある。由加大権現は、讃岐金毘羅権現と並び有名で、『金毘羅さんに参つて由加さんに参らねば片参りになる』と云われたほど江戸時代の人々に知られ、繁盛したところで、広重の絵に画かれ、円山応挙も参詣し名画を残している。塩原太助夫婦奉納の玉垣なども現存し、往時の盛況を偲ばせてくれる。

蓮台寺は真言宗の名刹で、本尊は十一面観世音(室町時代のもの)天平五年、行基が開基、鎮守の大権現は坂上田村磨呂の再興と伝えられている。江戸時代には備前藩公の信仰深く、数々の寺宝の中には国宝、重文が保存されている。県重文の多宝塔からの眺望は、

南無釋孤蓬先生	安藤寿美子	(50)
初歩教室	本田恵二朗	(52)
大萬川柳「想像」	川村好郎選	(54)
柳界展望		(51)
本社三月句会		(56)
一分間の柳論	藤井一二三	(57)
各地柳壇(佳句地10選)	谷垣史好選	(60)
55年度各地柳壇賞決る	若本多久志選	(61)
雅号ぶつちやげばなし	大道美乙女	(65)
「円満」	宮尾あいき選	(46)
一路集「暇」	山本立児選	(46)
「碑」	浜野奇童選	(47)
編集後記	(薰風・酔々・鬼遊・史好)	(67)

座右の句

ちっぴけな善意でもよし心満つ

(操子)

私の句

責任を持つと男の貌になる

宮園 射月芳

国立公園鷺羽山と共に筆舌に尽せぬものがある。春の桜五千本と鶯、夏の時鳥、秋の紅葉と緑なす山峡と素晴らしい四季を提供してくれる。

その多宝塔から桜五千本に至る二百五十米ほどの径の両側に川柳句碑四十数基を建立する企画の具体化が着々と進められている。

地元柳人のほとんどが参加するが、各柳人の句の選出を私に委嘱されて、三カ月ほどかけてその選出を終え、彫刻へ出す運びとなっている。石材は下津井産の花崗岩の自然石である。葉桜の頃には完成を見るであろう。多くの柳友の方々の観光をいただける日を楽しく待望している。

誌代改訂について

諸費高騰のため川柳塔誌の定価を四月号より一部・五百円に改訂いたします。何卒ご諒承お願い申し上げます。

川柳塔社



西尾 栞 選

大阪市 河野 君子

早春譜へはずめば他人の計に当り
三つ指つく心は見せぬ老母の足袋

占い師の言葉が丸い日の不信

逢えぬ日の伝言板に風がある

現実を少し離れる春帽子

二ん月の宿で軽くなる夫婦

竹原市 小島 蘭 幸

正確な時計が嫌になる若さ
達磨眼を貰い神通力消える

夫婦旅結果を急ぐことはない

子が二人夫婦はやじろべえに似る

子の小さい傷へ眠れぬ妻でよい

大阪市 小出 智 子

豆腐屋がいちばん春を待っている

水族館の魚ほどには悟れない

三百六十五日ひよっこり逢える日を信じ

春の来る所為かも知れぬ不眠症

言い遺すことをぼつぼつ貯めておく

新宮市 大矢 十郎

生き方の大事に勝る死に方よ

着飾っていても中古車なる父で

子が抜いてゆく悲しかり嬉しかり

合掌の思えば勝手な願い事

慶弔の弔にだけ逢うのも従兄弟

竹原市 山内 静 水

裁かれて裁く世相の二重底

しり馬に乗せてもろうた逆恨み

友達になれそう趣味の切手貼る

昔ならとうに鬼籍のくすり漬

狂ってはいない定規の当てかげん

青森市 工藤 甲 吉

悩むだけ悩めば先が見え始め
あるものといえは命が一つだけ

金が無くなるとオクターブが下がり
天上天下唯我独尊馬鹿親父
雪牢でテレビの寒の梅を見る

尼崎市

黒川紫香

大阪に生まれ算盤はじけない
ゴキブリも危機一髪は翔んで見せ
うどん屋の隅でこっそり遺書を書く
だし抜けに来るのが好きな故郷の母
気まじめに別れた妻の年賀状

藤井寺市

児島与呂志

悼 戸田古方先生(二句)

山茶花の庭へ訃報の電話ベル
はじめから判っているよな受け答え
残像が静かに廊下の冷えを知る
気兼ねする男で下積み知っている
人並みに噂は聞くだけ聞いておく

八尾市

高杉鬼遊

難民の飢えを知らないコシヒカリ
先輩がむかしの話ばかりする
増税を勝手にされるので困り
迷惑をかけているのは政治家で
いかなごにふるさとを訊く詮もなし

松原市

谷垣史好

沈丁花恋うてはならぬ人を恋い

人妻の恋は視線が定まらぬ

大和屋は薄明りして春おぼろ

若者に負けまいオーデコロン買う

シンフィーズ青い議論を弄び

高槻市

若柳潮花

燃えて添うふたりに仲人などいらぬ

叱られてみたいと女おもう日も

花街で育ち綺麗に歳をとり

正行の首塚があり竹さわぐ

戸田古方さんを悼む

句座で待つ師に逢うまでの一人旅

大阪市

川口弘生

先人は先人なりの穴を掘り

性善を言われ穴埋め強いられる

友ありて山頂印の年賀状

食うだけは貰う暮しは神に似る

繫れた犬を野良犬見て通り

大阪市

本多柳志

神さまを脅かす如し絵馬の文字

ざらば蟹北緯五十度など知らず

老いらくの恋 文楽へ誘われる

札束に善意と悪意見すかされ

傾聴に足る毒舌を採り上げる

八尾市

香川酔々

五瓣なり椿 紀州の海が蒼

風花や手で囲いするマツチの火

曼陀羅は姫の一生寒ばたん
落書きもこれは神妙家原寺
伏線に女の性が見えてくる

倉吉市 奥谷弘朗

それ見たか安定多数で税がふえ
相槌で逃げて居るのがよく解り
メンバーに利口も馬鹿もいて楽し
これからが養子の親に成る試練
ハンドルの役目の妻がいて平和

和歌山市 野村太茂津

同権は認める男の誇り持ち
誇らしく語って逆境清々し
保護色で居ながら目立ちたい男
頑固な夫に見事な依怙地通す妻
ボンコツに見せてもエンジン新しい

鳥取市 河村日満

ふるさとに根が生え風化するいくさ
雪しきり茶の間は夫婦きりの音
離段へ反り身で並ぶ寄附の順
刎頸の友あり金の仲立ちに
この寺の資産にふれる庭の松

今治市 長野文庫

掌の生命線は皺のよう

相手に弱身善処で区切りつけ

生甲斐は菊とか二月から騒ぎ

不正にも六法全書役に立ち

秒読みになっても抜けぬけち根性

今治市 月原宵明

保護色が頼る枯葉の彩が無い
止り木で非番のボリと肩を寄せ
りハビリーまさに老齡保育園
再婚へ祝辞ひとこと飛ばしとく
ミンク着て男はみんな馬鹿に見え

倉敷市 田垣方大

内孫は暖炉に遠い席をとり
雨ぼつり泊ってほしい実家の母
社長室いやな自分になっている
老妻と昼のドラマで喰い違い
旨いもの食べたいだけのルビー婚

八尾市 納糸葉

風車一段高い風が好き
風の日風がおかしい十五、六
錨巻く未練のままの錨巻く
裏通り古都も暮しの風が吹く
美しい嘘美しいまま脹れ

倉敷市 野田素身郎

同期の桜も一人逝き二人散り
まだ生きて欲し母九十にして手術
友達は友達同士で来てるのに
進路指導親の欲目と噛み合わず
月おぼろ守衛まぶたが重くなる

倉敷市 水粉千翁

つまりてひとを信じようとする

座布団を滑り身につまざれている

押花を添えて日記も口ごもり

ご無沙汰を敷く座布団の温さかな

膝に手を置いて聞いているほめことは

松江市

小林 孤呂二

功成つてからは雪解け見る如し

欲のない男で近道などしない

窓ぎわに居座り白鳥の湖ながめ

出好きでもよし妻の心得わすれてず

4 Bではもう描けない世相かな

兵庫県

遠山 可住

お色気が適度好かれる老いになり

転勤へ馴染めぬ冬に長居され

肩書がついて握手が好きになり

退職の散歩が拾うて行く景色

黒髪のおいたしかに人を恋う

桜井市

岩本 雀踊子

いつにない無口な妻が怖くなる

自分にも聞かす愚痴が少しある

長い目の棒切れ持っている強気

風上の私に味方などいない

消しゴムの角のまるさにある弱気

東大阪市

市場 没食子

傷だらけになった一円貨を拾い

可愛がられる年寄りにようならず

歩巾の差遅れる妻をふり返り
雪除けりや土は春なり露の臺

柳俳句集「星霜」を頂く(埼玉県)

和紙和綴じ雅趣もうれしく貞繰る

岸和田市

高橋 操子

同病の安否ニュースは雪と云う

雪の夜の酒ぎんなんのはぜた音

仲の悪い夫婦へヤジロべゆれて見せ

大好きな人と土佐犬知っていた

民宿の雪キャンセルの外はなし

岡山県

岡村 久志良

友ありて遠く来りぬ泣けよとや

真昼の夢破つて並ぶ友の顔

久闊の友が残した掌のぬくみ

握手攻め炬燵の三毛はどこへいた

ぬつと来てさつと引き揚げ余韻置く

島根県

小砂 白汀

紅刷いてさて税務署へ立ち向い

祝う気があつても日の丸出しそびれ

残したは記念貨幣の五六枚

自殺などするなよ裏口開けてある

引き返す距離も計ってついてゆく

大阪市

中川 滋雀

沈丁花二月の風を抜けた路地

左手も同じ苦勞の皺はあり

鍵かけたときから不安が同居する

大根の高値がしみるおろし金
灰皿にねじ伏せられた妥協案

豊中市

安藤 寿美子

温顔にかかる悲しい黒リボン
又来ますよってと言うてそれっすり

年の豆遂に病魔に間に合わず

予約制喪服のまんま齒科へ寄り

計を聞いて今日は開かぬ福寿草

和歌山市

松原 寿子

掌の鳴る方へ世間の風は甘くない

沈黙の深さの中にある掟

掟の中で背に潮騒が鳴りやまぬ

分別の涙ちいさな川となる

恩愛の盃へ置く意地ひとつ

大阪市

大坂 形水

土を出て戻り寒波に遭う蛙

小さい背に重過ぎる荷のランドセル

孫はもう遊び盛りを塾通い

磨いては見ても所詮はただの石

来なくてはならない席が空いたまま

富田林市

板尾 岳人

歩かねばならぬ男が街に居る

名文の遺書を欲しがらる滝の水

四ん月の水は賑やか山静か

豆腐屋の水のルーツは滝である

山の峰カレーライスの匂いする

趣味にまで皆勤出来るありがたさ
あきらめたり感謝をしたり老夫婦

大阪市

金井 文秋

それなりに素顔が生きる薄化粧
相手確かめず電話がしゃべり出す

滝の音ビールがうまい一と休み

柳井市

弘津 柳慶

妻が好きだった番組かけて見る

いつ見ても遺影類笑んだまんまなり

風邪気味の寢床へ間違ひ電話来る

嫁貰うてやるから帰れ同じ屋根

下関市

国弘 半休門

殴つてもなぐられても先生叱られる

ゆすぶつて見て杭打ち安堵する

歩きよさそう男物履いてみる

島根県

西村 早苗

口けんか探ればあなたにも落ち度

星まばたいて背かれしは事実

子が気づく妻の言葉を黙し聞く

自信ある言葉の語尾がのしかかり

米子市

小西 雄々

愛情に弱い男がワイン抱く

夕食へ便秘のコマーシャル続く

ポケットベル草の根わけするように鳴る

幾度かピンチを越えた夫婦箸

米子市

石垣 花子

一言へ補聴器晴れたり曇ったり
辞表書く筆に心を見透かされ
妻ある日忘れた筈の傷にふれ
盗むよに覺えた芸に陽があたり

平田市 久家 代仕男

白菜に花芯がのぞく小正月
初場所が済んで氣抜けの隠居部屋
目だし帽デストロイヤか銀ギヤグか
六十の退職にない羅針盤

岡山県 嘉数 兆代^{ちよか}買^か

思いきり泣けよと神が闇をくれ
博多帶きりりとしめたおんな坂
想い出を歩けばたのしい日の筈
行く道はひとすじ矢印など要らぬ

西宮市 藤村 女

花便り満開までを縫い急ぎ
花便りそえて新居の通知来る
泣き虫を四五人囲む一年生
何気ない仕草が母に似る娘

島根県 堀江 正朗

妻の退院祈りつづけて酒をやめ
一日の長さを独り呼吸する
太陽のいらだち雲が動かない
音ひとつひとつに想う妻のこと

島根県 堀江 芳子

淋しさに負けそうなので髪を梳く

いのち継ぎ継ぎ足されつつ還暦に
美しい心で見たい眼鏡拭く
顔みんな違う親切ありがたく

米子市 八木 千代

雪の窓この静謐を破るまじ
曇り空なるほど恋し人の影
栄光の刹那へ引ける幕が欲し
屈折のドラマがあっけなく終り

米子市 林 瑞枝

過去みんな拭き消す紙の色さがす
痛うない手術にメスの音を聞き
姿見へ妬心隠して向き直る
拌む手は神と取引などしない

島根県 藤井 明朗

親をだます子の知恵見破れず
年輪の艶は家運をひきしめる
思ひ出を樂しみ夫婦に運が向く
お遍路へ鐘がおまけのように鳴る

大阪市 津守 柳伸

鬼は外一人世帯の豆の数
雪シンシン赤いポストも夢を追う
決心をせまるポストが赤すぎる
更年期樹氷見たさの登山靴

鳥取市 小林 由多香

音消して反省多き日記書く
納得がいった眼鏡のくもり拭く

たわいなく酔うて女をさらけ出し
酔つ払いの罪罪を意識せず

八尾市 宮西弥生

才たける女は口へ蓋をする
この家のドラマ汚さぬ床の壺
中年の磨きへひと言多くなる
この道ひとすじ重さのつづく日々

松原市 玉置重人

銀婚譜スーパ―へ行く失業中
4DKローンの長い長い道
下積みそのまま福耳悔はなし
いつ死んでもよいとは見事な嘘を言う

大阪市 那須鎮彦

お似合いの夫婦むちやくちやお人好し
社長の白髪へ不足等言えぬ
俺を豊かにする確かな妻である
今日の俺どうかしている妻を打つ

大阪市 江城修史

風に舞う枯葉よ絆も遠くなり
有為転変希望の星の遙かなる
妥協した心を抜ける隙間風
偏見へ尻っ尾を振らぬ誇りもつ

高槻市 福田丁路

百歳を目指す心にあるゆとり
君と僕あなたとわたしの腐れ縁
剣聖もかくやと鍬を振りかぶる

山深くひとときわ目立つ仁王門

奈良県 村上春巳

車窓から温かそうな灯が見える
そういえばエンピツなめる子がい
新米の課長釘ばかりさしたがり
叱られた様に叱って焚火かな

松江市 柳楽鶴丸

コンピューターがこわがる女性の静電気
心地よい早春墨彩鮮かに
結婚二十年Wベッドに替える

娘の就職

お茶汲みでもよし日本一になれ

八尾市 高橋夕花

平和なるわが家は父の旗の下
春寒し女の味方ひとり逝き
大根の白さを誰も疑わず
立春や太り過ぎたか影ぼうし

出雲市 原独仙

艶聞の主は元気で七十五
医の進歩命伸ばして苦しませ
病院を溜り場にして無料組
場長が輪卒で守衛は元佐官

倉敷市 藤井春日

風見鶏自分を捨てて風まかせ
院居士の肩書持って地獄行き
粉末酒に冷凍魚晩酌まずくなるだろう

ライバルが居たので今日の地位がある

神戸市

中村 ゆきを

風が出てものが静かに乾き出し

白虎隊の年頃なりき師を殴り

旗色を眺めて柱の陰にいる

饒舌な男が落ちた蟻地獄

岡山市

川端 柳子

男涙一生一度の出番です

待ち呆け暦の春は来たけれど

ごめんねと言うのは妻と決めている

ひとり一人巣立って心もとなない手

大阪市

西森 花村

眼鏡探す眼鏡が欲しい古稀祝う

融通を何とかしたのでお役人

いずれ又先手を打って倒産し

相談の仕甲斐があつて文句聞く

松江市

舟木 与根一

豪雪は生活の知恵越す高さ

国鉄マヒ広い日本になつてゐる

新築が丁度裏窓覗きこみ

手術してみるかと医者がかかるく言い

島根県

梅 みどり

冬の帯しめて小いきな客となる

亡父の愛もろ手にそそぐ母も老い

陽がもえる節句の水がぬるみ出す

近火みる身宇宙に浮いてくる

向う意気の強さを買って旗手とする
大田市

藤田 軒太楼

メンバーの一人は街で顔がきき

口下手のくせに秘密が守れない

横文字のラベルに惑う品が増え

和歌山市

内芝 としよ

詩心そそる雪にも怖い貌

人間もけじめつけよと四季巡る

肥満体苦勞したとは嘘のよう

色眼鏡かけて自分を見失う

和歌山市

垂井 千寿子

先頭が居るから続く蟻の列

魅力無いと言い張っている魅力

新雪を踏む足跡はふり向けぬ

泣く事が出来る一とこ女持つ

倉敷市

臼井 三林坊

逃げ道を開けて名士のインタビュー

かかる世を見切り屋根から落ちる雪

先代のその背のままの前かがみ

他愛ない話焼香待ちながら

姫路市

植村 客遊子

胎教やかたと音楽会めぐり

流れ星あの娘の顔が消えて行く

大胆なポーズで女爪を切る

定期券拾うて貰てからの恋

京都市

松川 杜的

狸谷不動尊初不動詣で

ガン封じ笹酒素直に受けておく

金福寺にて(一句)

石碑の字「月斗」をアッパに撮って来る

何処へ行く夕焼空を貨車の列

ゆり鷗秘境の春は語らない

鳥取県

川崎秋女

再会の手と手従妹に癌が棲む

言葉にはならず双つの手を合わす

孫と折る千代紙あした想うまい

横に這う蟹も自由を主張する

宝塚市

傍島静馬

誰よりも自分が僻んでいた愚か

お伽ばなしの矛盾に眠れぬ知恵ざかり

ポートピアの春に羽ばたく風見鶏

ヅカガールのコースで石焼き売尽す

神戸市

仲 どんたく

シャツ一枚ほどあたたかし水仙境

定九郎ばりのヘヤーで恋の歌

過ぎたるは及ばず歌にもならぬ雪

三十円 一銭五厘でありし頃

堺市

高橋 千万子

場違いな人画廊での声高し

勝気ふと敗ける予感でくじ引かず

その先を考えている猫のヒゲ

残り火のくすぶるままで逢えぬ人

口答えせぬ少年が恐くなり

人間が出来たと妥協はめられる

まがつてる道で遠足歌が出る

春の陽の恵みへ老いの愚痴がより

京都市

都倉求芽

お灯明揺れて何かを暗示する

これみんなうちでとれたともてなされ

化粧せぬ妻娘わが家に相応しい

人生の虹もうひと色しか残らない

羽曳野市

塩満敏

天使の食欲に乳房負けてない

孫寝かす子守の唄はカラオケで

宿の下駄社会見学行きたがり

王様の耳の秘密はロバが知り

富田林市

岩田美代

寒の雨昔程には憎しみ持たぬ

あきらめて人の寒さなど言わぬ

あるだけの冬バラ剪らすぬくい人

甘酒で足りる男に桃の花

倉敷市

稲田豊作

満月へ犬は鎖の刑を哭く

儂に小言いうのが老妻の道楽で

残り火を燃やすといやらしと言われ

思ひ出は余りに恥が多過ぎて

鳥取県

鈴木村諷子

今治市

越智一水

せめてもの抽斗整理しておこう

天地無用花梱包にある温み

七十の胸にも母は生きて居り

彼のいるところが正座でみんな寄り

生駒市

草深酔升

一と言へ二と言返す世代の差

札束の夢みて一生棒に振り

我が咳でしじまを破る夜のつらさ

寝正月のつづき年越し来てしまひ

島根県

錦織文子

ふり向いて青春の悔いに逢う不覚

半島が抹茶茶碗に甦えり

冬の天津儀な父の軍手干す

夫婦の両輪特には軋む音のして

奈良市

森田カズエ

救急車のライトに粉雪舞っている

人体解剖図娘の夢をこわしそつ

爛漫の春より先に新酒の香

寡婦であり母で気強い世帯主

橿原市

岩井本蔭棒

無職にもなんやかんやと予定表

ウメチカで一つ買ひ足すみやげ物

寡婦ある夜甘い言葉に苛なまれ

安売りもならぬ娘を持て余し

松江市

梅本登美也

ふと母がものに例えて意見する

年甲斐もないこと思ふおぼろ月

針ひとつ持てぬ女が翔びたがり

修身の科目をふつと口にする

笠岡市

松本忠三

大学で何を学んだ誤字脱字

身から出た錆だというも憐れなり

騒音の虜になったヘルメット

垣根越し一声かければいいものを

鳥取市

有田とし江

子が戻る日の空港へ雪止まず

慰めは一人で歩く石畳

くちずさむ歌は亡夫の好きな唄

神様にだけは本心云う頼み

米子市

佐伯越子

しげさ節踊れば楽しい皿も鳴り

ひとすじに国宝と言われ紙を流く

絆たつ修羅のちまたに尼の業

身の露を重たく寡婦は胸に積む

岸和田市

清野こう

豪雪の故郷を偲ぶ

風流を越して恐怖と言う白魔

玄関は雪の階段上りおり

豊作を信じ耐えてる雪の中

真白い雪が閉ざした暗い家

兵庫県

辻文平

忠告を蹴る靴紐を締めなおす

頼冠り男盛りを過ぎしかな
長き刑終えしが如く試歩の庭
溝浚え終えて百姓飲む話

大阪市 天正千梢

相槌を打って施したつもり
自分だけ真の尺度と思っている
生かされて出発点に立っている
ひからびた人生打水したくなり

八尾市 大 路 美 幸

雨の唄好きな男はさびしがり
やさしさが時計のねじを捲かずおく
泣いている女の背なにある打算
花咲けば花にたとえていろいろのち

仙台市 川 村 映 輝

専守防衛隔靴搔痒の感もあり
カメラマンにせかれて二度も握手する
幼稚園ボーイフレンドヘチョコレート
北方領土鷗の子孫が今も住み

和歌山市 若 宮 武 雄

慈愛とは哀しきものよ子守唄
人間に飽き赤ちやんを抱きしめる
野良犬の自由に飢えがつきまとい
嬉しくてたまらん時も茶碗酒

寝屋川市 江 口 度

すぐ横で地んだ踏んでる福の神
箒もつ青年もいる建国祭

自動化の波へ泣いてる力こぶ
ある期待いつもの時間に朝を出る

京都市 山 本 規 不 風

新聞の計の年かさの数を読む
チャリティに弱い女のお買物
試めされていると思えば負けておく
性格の違いを九年目に云いつのる

島根県 大 森 孝 華

物価などよそに燃えてる寒椿
熱燭へとけて故郷のうわさなど
招かれて六十路の坂へ紅すこし
未練など捨てて楽しむことにする

守口市 野 呂 右 近

箱で来たみかんに豊かさ思う日々
建国の佳き日に孫の呱呱の声
喜びの顔がうつった水溜り
細く長く暮らす話に耳を貸す

富田林市 中 村 優

裏話聞いて愉快なコップ酒
一生を頑固でとおしたデスマスク
老後までもたぬ目減りの預金帳
立前の話で肚を探られる

大阪市 本 間 満 津 子

慾捨ててこのやすらぎが手に入り
生命ありこんな嬉しいことに遇う
覚悟して出れば冬陽が暖かい

捨て猫が又増えるらし臘月

宇部市

平田実男

ダシ昆布のように定年捨てられる

つい本音出た一言へこうもつれ

父見舞う日に日にやせて行く恐さ

年金のある年寄りで邪魔にせず

大阪市

神夏磯道子

どの星も私を見てる歩まねば

漁火を慕うて網の中に居る

ほどほどの位置で邪魔にならぬ椅子

春の陽を喜び過ぎたはぐれ蝶

鳥取市

岸本無人

ひよっとして逢える期待の遠廻り

八重に咲く花で実らぬ恋を持ち

雪国に住んで雪に驚かされ

故郷へ見栄張りすぎてからの距離

玉野市

小谷仙山

何事もなかった靴は泥だらけ

おもしろい話子供はあっち行け

仏心出した時から負けていた

声上げて泣けぬ男が酒に酔い

大阪市

黒田真砂

三面鏡女の業をかくし持つ

甥結婚

愛の賛歌流れて拍手満つ門出

沖繩旅行

姫百合の気高く香る今も尚

同胞の血の叫び聞ゆ摩文仁が丘

姫百合の塔
平和記念堂

島根県

榊原秀子

かなしみの果てはとばないシャボン玉

日脚伸ぶそのたしかさへ春を待ち

そそくさと荷をした後の忘れもの

無気力をただ風だけはさからわせ

和歌山市

西山幸

喝采も同じ音色でない寒さ

何もかも見たので仮面外せない

ここからは口を噤んでおく勇氣

偏頭痛いつまで続く人嫌い

和歌山市

浦野和子

愛憎を静かに消して積る雪

戦跡を歳月名所にして丁う

名月抄筆流麗を唄い上げ

世界地図何処かで足並揃う音

堺市

大道美乙女

旅行けば土地の情と待つ地酒

マツチする指に昔が匂い出す

割り切ったのにまだ残り火が身を責める

未練捨てて明日を生き抜く寡婦の意地

倉吉市

渡辺苦句

お浄土は深雪晴に似たところ

ポケットに入れても寒い拳です

余剰雪天がどずどず放出し

ふぶくから帰巢本能が先走り

和歌山市

福本英子

橋渡りきる迄女らしくいる

言い勝って眠れぬ女へ落椿

木守りを見向きもしない百舌鳥の意地

新築へドカ雪夫は出稼ぎ中

三重県

坪田冬花

特価品虚栄心が邪魔をする

客が来て怒りをがらり変えて泣き

馬鹿でかい声で電話がはかどらぬ

ごまかしの笑い苦しい娘の見舞

青森県

五十嵐操史

家計図の由緒の中に生き抜いた

テレビ今世代交替真最中

身体迄売るとは言わぬチラシ来る

同窓会大法螺小法螺渡り合う

西宮市

野呂鶴汀

停年で妻から小銭貰う日々

風邪引けば孫も女房も寄せつけず

綺麗好き妻はモンペが好きと言う

社を出ても上司やっぱり上手にて

神戸市

山口美穂

忘れない忘れたくない人に逢い

逢わなければよかったものを夜の鏡

日曜の雨よ無性に人恋し

流れ星願い言葉にならぬまま

竹原市

森井菁居

海図など要らぬ男の丸木舟

標的へグサリとささる無欲の矢

裸一貫同志で明日の風信す

玄関に靴が乱れている平和

泉佐野市

阿萬萬的

郵便貯金が限度善人貯めてます

時の止まった一幅の絵に猫寝てる

家元の庵主は留守勝ち冬の寺

綾瀬市

大山と金

意見ちがっても胸張って風の中

起居動作素朴のなかに礼があり

造花では豆になるまい藤の花

松江市

恒松叮紅

お友達が出来て孫から離れられ

童べ唄知らぬ子が住むウサギ小屋

定年の朝のゆとりを羨まれ

鳥取県

清水一保

世間はどうかあれとも雪の伯耆富士

真剣勝負なのに切れ味悪い奴

借りる人貸す人歯車音を立て

兵庫県

大江秋月

覚え書明治の筆が冴えて居る

エリート街道故郷に遠く居る

年金を孫にすっかり持ってゆかれ

東大阪市

斉藤三十四

台本の此処でお客が笑うところ
三隣亡棟梁曆はなさない
他人様に同情される不幸

倉敷市 小幡里風
伸び切った輪ゴムへ僕の独り言

名刺には苦勞人とは書いてない
見えすいたおだてに乗った日の誤算

姫路市 大原葉香

四時五時六時病める一日暮れんとす
雑音を退け新茶の味に酔う
公印を押せば文字が威張り出し

東大阪市 森下愛論

泣かされた子を囲んでの話し合い
すれ違い匂いで女だと思ひ
ひとりものかと月も覗きこみ

諫早市 原田明春

好きなもの喰わせと医者を見放す気
もうすぐに嫁くというのにまだデート
女房を孫にとられている手酌

呉市 林野甦光

髪型を心機一転春にする
このビルの高さへハットの息が切れ
球審の裁く人差指疼く

松山市 谷真風

お美味しく炊けたよ亡妻にも供え
消火器の無事平隠な埃ため

所詮もう翔べぬ女の瘦せ薬

大阪市 河井庸佑

ひいき目に見ても勝てぬとあきらめる

窓際におつてもプライド高い人
通勤車意気のいい顔悪い顔
奈良市 宮口笛生

停年後あの世へ駆足してよう

宮仕え離れて早い年めぐる

雪が降り陽が照り単線一人旅

唐津市 新岡回天子

紙のひなそれでもよろこぶ暮しむき
福は内とじこめて欲しい娘いる

身障者優先バスにそり返り

岡山市 時末一灯

吉か凶か手術室の灯まだ消えず
受話器置いて悪の囁きころよろし
モデルルーム応接セットはかいてなし

美祿市 安平次弘道

空缶の行方は知らぬ販売機

影武者がその気になって来た謀叛

良心が麻痺して闇に眼がなれる

岸和田市 福浦勝晴

文学に無縁の妻で日々達者
運命に甘んじ指圧に眼を閉じる

真夜中の父の遺影の瞳を怖れ

兵庫県 河原みのる

社員募集コキ使うぞとかいてなし
半呆けのオレが吾が身を点検す
またしても会とは欲が先走り

大阪市 西川 善紫

子等曰く便りはせぬが無事でいる

禁煙したのに頂いた喫煙具

奇縁です貰うたお名刺同じ姓

大阪市 室谷 徹舟

コップ酒裸かの心拾うて去ぬ

借りた義理返しやいいでは済まぬ義理

いいとこに黒子があるのに苦労する

兵庫県 林 露杖

麗かや弾む厨は嫁の音

金の無いことは恥じねど金が要る

水音で紙漉く男女の別を識る

豊中市 増田 次章

飾られた言葉の方が信じられ

俺でさえ昔話に尾ヒレつけ

熟慮して一番まずい答出し

鳥取県 森田 布堂

難産を忘れたようにまたはらみ

肩書が祝辞弔辞と走らされ

修身科もう手遅れの世と変り

大阪市 横地 雅風

鼻先の笑いに金なし耐えざされ

箸捌き下手な豆腐の舌ざわり

騒音の世で漫才のやかましき

寝屋川市 宮尾 あいき

亡夫の夢漸く寢床で暖める

噂話もうあきました貝になる

家事に追われて幸せそうな女

大阪市 藤田 頂留子

ウインドーながめる女はスキだらけ

オニホトケ使い分けてる苦勞人

底辺に生きてもかけりのない笑顔

和歌山市 坂口 公子

墨をする心次第にないでいく

霧の降る夜で泣いてる山灯り

盛大な拍手へ一歩退く勇氣

岸和田市 島崎 富志子

生命の保証の保険が殺意よぶ

事務服を着れば背腰がシヤンとする

旅先の妻が電話で指図する

松原市 北野 久子

針好きの亡母が私の中に居る

一張羅を着ると足腰軽くなる

難聴のペンはテレビへ止まらない

倉敷市 斎藤 通風

海鳴りは明日の米櫃覗かせる

燈台の灯思い届かぬ霧の中

人間を試し切りする電霞

大阪市 柳原 静香

愚かにも母と言う名で強く居る
寂しさに夫へ挑戦したくなり
嘘言える程に私は偉くなし

出雲市 吉岡 きみえ

だまされておきましよう明日がないでなし
わたしには私だけの歩幅あり
母の目に尾灯が消えてゆく別れ

東大阪市 崎山 美子

本心とは別に握手の手のぬくみ
青年の若さまぶしい年齢となり
たのもしいきずな盃から生まれ

町田市 竹内 紫 靖

中継の衛星どこでもいい拍手
エスカレーターむかでたじろぐほどの風
答弁に向く語はまだかコンピュータ

岡山市 花田 たけ志

成仏の息子を叱る生き仏
自殺の父母がほめれば座が白け
出しゃばりに云うだけ云わせて釘を打ち

大阪市 北 勝 美

大寒へ下戸の粕汁三杯目
無料パスもらえぬ齢を信じない
一駅は歩きまっせと老いの脚

加賀市 細呂木 魯 木

無神経を笑って釘の穴違い
仏像の魂信じて凡夫なり

稲妻が吾にささった身の覚え

岸和田市 古野 ひで

信楽の狸は人をだまさない
寒月をつきさすように枯木立ち
意地通す老いにむなしい余韻だけ

岡山市 井上 柳五郎

まだ見えると富士を左右の窓に追い
飴嚙んで義歯欠けたも老い話題
宝石の妖しい光り密輸かも

東大阪市 竹中 綾 珠

百合匂う寒の仏の前に座す
亡夫との旅思い出しつつ民話聞く
子の相手する時役職消えている

岡山市 出原 敬一

夢に会う父逝きて尚髭をつけ
振り向いた和服どこかで会った柄
遠い日の想いが梅咲く丘にある

岸和田市 原 さよ子

あの時の我慢で友情まだ続き
じいちゃんと寝るとは約束だけのこと
花咲けば便りをくれる友がいる

貝塚市 行天 千代

雪の夜は心も冷えて帰り待つ
十三回忌勤めて心の荷をおろす
御法事へ子供も孫も全集合

島根県 角 耕 草

白菜を雪の穴から差上げる
葱提げて雪の団地へ娘が帰る
寒鮒を並べる雪を踏み均し

出雲市

板垣夢醉

湯煙りがアチラコチラに立ち別府

大柄な女の如き牡丹咲く

違和感となる暖房の外は春

枚方市

水野弘

医学部の門をキャッシュでこじ開ける

親の脛嚙ってる方が太い脚

一匹が釣れて煙草に火を付ける

羽咋市

三宅ろ亭

あれからは少し距離置き話す人

無人駅ひとりで仰ぐ時刻表

ゴミ袋破るチエあり鳥寄る

大東市

土岐トク子

夢二画く絵の楚々としてフィアンセ

あたたかい目に誘われて同窓会

負けて勝つ知恵も嫁いで二十年

大阪市

西出楓楽

用事みな電話で済ませた空しさよ

大寒の苺不協和音めきて

風邪もよい竹久夢二の顔でいる

和泉市

西岡洛醉

心電図走るなかと針のゆれ

涙もう枯れた女で路地を出る

枯れ花に成ろうとも今日は赤く燃え

岡山県

岩道博友

しつけ糸取る母の手に今日の幸

年代差気にせず同じ趣味で生き

駅裏に出てから薄れた旅心

大阪市

神田秀峰

釜ヶ崎一度行幸して欲しい

停めたいが定年迄はと鞭を当て

環境の悪さへ律義愚痴が出る

出雲市

園山多賀子

市場籠提げた男の生活浮く

頼杖のゆとりにも男模索する

白魚のいよよ透けいて酔になじむ

守口市

羽原静歩

親も子もフアッションショーの入園式

バーゲンバーゲン人間もバーゲンか

言うなれば人間不在の役所なり

八尾市

飯田悦郎

目に華麗積ると被害のはたん雪

合掌をしたい心は霧深し

青春の花は宿命の中で咲き

三重県

川上溪水

ブライドを捨てれば幾つも道が出来

妥協点見つけて負けてやる男

無学でも母には教わる事ばかり

鳥取県

福田保子

運針のリズムが狂う使い捨て
笛吹けど踊らぬヒロにある自戒
ブレゼント女へ打算の目が光り

東大阪市

奥山弥山人

鶴の恩寝物語りの母惚ぶ

それなりに情熱で咲く壺の花

ポストねらう猪口が又々やってくる

兵庫県

藤後実男

口笛が廊下を過ぎる回復期

肌ちらりテレビが憎いコマージュ

何もかもあげると女酔うていず

島根県

大野酔夢

イカ焼きの指にダイヤのあった過去

いわし雲明日を賭けた男の瞳

六十の心を老兵まだ走る

七尾市

松高秀峰

穏やかに話せばわかる明治人

金銀も手にして倒産したらしい

嫁がせてひと息つけば妊ごもれり

京都市

山本桐下

土筆摘む子に誘われる病みあがり

満点のうわさが怖い夫の影

花の名を覚え花屋の子の優し

姫路市

梅谿庵不酔

七転び起きて見せるぞ俺も意地

今日無事に送り心配される明日の無事

竹原市

時広一路

玉砂利の音から邪心消えてゆく

愚痴捨てた渚に潮が満ちてくる

和歌山市

中根勇太

初恋は十九の春の雪と消え

鴛鴦の夫婦と呼ばれ逆らえず

海南市

牛尾緑楼

病床へ少年の日の竹トンボ

飛び込んでみれば素直な目に出会い

河内長野市

井上喜醉

自己主張睡を飛ばしてよう喋り

雑草も苦勞をしてる氷点下

出雲市

石倉芙佐子

揉み手する男を嫌う桐火鉢

許されぬことだと知った紙人形

大阪市

欄蘭

嬉しさにローソクの灯も吹き消せず

失業中倒産の友訪ねて来

岸和田市

狭間希久志

愛憎の愚痴羅漢まで渋い顔

淡海を裁く閻魔が笑いだし

岡山市

直原七面山

米屋もパン食

構えれば蠅が逃げ

本田恵二朗

やじろべい横になりたい時もあり

雨までがニコニコ降つて嬉しい日
寸豪の乱れも見せず斗酒辞せず
壺の中から陶工の血がこぼれ出る
産油国に振りまわされる世界地図

正本水客

最前列に陣取つていてよく笑う

真似するなするなど滝の水が落ち

善人の夢たからを少し埋めておく

庭を掃く父と一緒に庭を掃く

大銀杏むかし栄えた空がある

浜田久米雄

春の酒酔えよ酔えよと花が咲き

当てにする寿命は瀬戸に橋かかる

年取つたせいだと医者はおつけないし

妻の言う理屈だまつて聞いてやり

変な句に私の首は横に振る

尼緑之助

波がしら問答無用を振りかざす

一票の軽重流れの中におく

独善の叫びに隠すエゴがある

繰り返す歴史に時の花を買つ

春を待つ雨だれのうたじつと聴く

伊藤茶仏

立春の暦に雪が降りしきる

戸が軋むまま豪雪を愚痴るのみ

降りしきる雪に目隠しされたまま

電線は雪の重さを知つて切れ
五十年忌写真嫌いな父でした

西尾 栗

てつちりや路郎門下の生き残り

北枕家具の谿間の雛祭り

内裏雛並んでいますだけの仲

雛の鼻よくよく見ればあるのなり

雛祭る隣りの部屋の句座に在り

若本 多久志

齡の功人の話の裏が見え

方便の嘘もほんとに聞いてくれ

山川草木そんな言葉も出ぬ世相

まだまだと自己充足のペンを採る

人間くさい灰汁が抜けてく寂しさも

菊沢 小松園

演壇のポーズで被告席へつき

本読まぬ人の立派な蔵書印

本人の他は生き過ぎたなとおもひ

寿と書いて重たそうに持ち

言い訳が上手になつてUターン

川村 好郎

また風邪かそれみなはれとほつとかれ

小康へ卵を春の音で割り

たまさかにドキンとさせる妻の勘

墨をする瞬間亡父が通り過ぎ

乾き切つた女電卓手離さず

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

山根 白 星

水平線今にどんでん返しある

橘高 薫風

本誌は勿論のこと、全国的にも著名なこの名作家の力量を存分に見せてくれた逸品であった。これまでの写実的伝統には含まれていなかった夢の位相に於て、忌わしい核時代を生きてゆく人間の絶望感と、そこからの脱出を祈願する作者の「歌にあらすんば払い難い」苦悶の絶唱なのである。

この詩藻豊かな作者の思いの深さまで鈍重な宝船を沈潜させることは難しいのであるが

〈十二月八日八月十五日 水府〉

いみじくも啾啄同機と言った作品を思い返べて、これこそ鑑賞のすべてではないかと、はたと膝を打ち快心の微笑を洩らしたものである。

海は死にますか少しまだ嘘がある

正本 水客

前述の作品「水平線」に囲まれた海 〈海

の中に母が居る。メル（母）の中にメル（海）がある」と三好達治は謳うのだが、太古から受け継がれてきた生と死の伝説の海などはや、ありはしない。非在の海なのである。解釈を拒絶して動じないものが美である、とも言われるが、この作品は、受信機に故障さえなければ、応待にさして困難はない。

「歩調トレ」と言いたいようなブーツ来る

松川 杜的

欠点の鼻で似顔絵生きている

舟木与根一

除夜の鐘ローンローンと響くなり

河原みのる

W・Cとあるスリッパで酔うて来る

森田 布堂

白鳥の先発隊が一羽いる

五十嵐操史

このところ革新系を旗印にする川柳結社の中には、えてして現代の共通語を喪失して、めいめいが唯我独尊の隠語を吐くような徒輩が多いけれども、掲題五句のユーモアは、それぞれが確かな伝統を踏まえて異彩を放つ。

〈歩調トレ〉は、戦前派、戦中派ならば、その適合性に拍手喝采を惜しまないであろう。

作者の善意の揶揄も透けて見えて、面白様の佳作であるが、当のブーツの佳人は、意味不明と、怪訝な顔をなさるかも知れない。

〈似顔絵〉、欠点のない貴公子、貴婦人は描き難いものだそう。

獅子鼻、鷲鼻、団子鼻等は、相貌の中心に鎮座ましまし専横をほしいままにする。特徴

的で絵になり易い。愛嬌もある。それにひきかえ自身の端正な容姿を鼻に掛けて、鼻をうごめかす御仁は、まことに鼻持ちならない。

〈除夜の鐘〉は、悦びと悲しみが愛し合

つて生み落したブラック・ユーモアである。

人生の地獄めぐりに、鐘の音もローン、ローンと聞えるのか。でいとう、でいとうと、

夜の鼓でも打ち給え。

〈建売りのローンの払う余生のみ〉嗚呼。

四句目の「スリッパ」の光景は、団体さん

の宴席などでよく見かける。放歌高吟、女中

さんのお尻を撫で、同僚の頬にやたらキッス

の雨を降らすこの酔漢も、所詮は、煩惱につ

ながれて流転する迷界の人なのであろう。

〈白鳥〉の句は、至妙な「先発隊」の語彙

の導入で静寂なモノクロームの風景に昇華さ

せた佳品である。きつと、にび色の空があり

声は微風を呼んでいることであろう。

先頭にたつ駄馬なれば狂えない

嘉数千代香

この駄馬の背の荷は、鉛ほどに重い。勤勉、

愚直、責任感を絵に描いたような先頭馬は、

賞讃されるより、非難されさとして、習俗

と歩調を合わせ、もはや、ささやかな願いの

成就すら期待していいない。行くては、狂うこ

とさへ許されぬ荒野があるばかりだ。上層部

ほど濃い悪の密雲を見やりながら、

残念ながら紙数が尽きて、触れられなかつた感銘句を一句。

オモチヤ箱整然として風邪続く

小島 蘭幸

川柳 太平記 (35)

石部金吉の魚屋五世

東 野 大 八

話を再び歴世川柳の本筋に還そう。

初代柄井川柳から、現代の第十四世根岸川柳までの二百六十年間の川柳継承史をふりかえるとき、最も注目されるべき世代は、川柳を狂句に一変させ「俳風狂句」を宣言した四世と、この狂句をひたすらに踏襲し「柳風狂句」を唱えた五世である。

ごく常識的な感觸からすれば、四世が「狂句元祖」を唱えたのであるから、「狂句初世」と名付けてもよさそうに思えるが、あくまでその世襲上の呼称は「風梳庵川柳」である。五世に至っても同様で、その表看板は狂句にあらで「緑亭川柳」である。短詩型の一つである「川柳」の呼称が当節まで生きながらえてきた一要因には、こうなると一にも二にも

川柳の呼称を持続しぬいた世代にあるということが指摘できよう。

俳諧における純正文芸としての川柳の事蹟を打ち樹てた柄井川柳は、理窟からいえばその世襲三代で滅びたのである。そしてその四代は天明の狂歌ぶりの風潮を反映し、デカダンスな化政期を背景に、川柳を狂句に塗りかえた。柄井三代が名跡ある名主職に對し、狂句の元祖を自負した四代目は、八丁堀の同心である。更にそのあとを継いだのは魚屋である。落ちれば落ちたものだが、それ故にこそ、名蹟ある柄井家の家伝川柳名を固持したのかもしれない。その支えは、一にも二にも前句付を一句独立させた柄井川柳の手柄にあったことは言うまでもなからう。

さて、今回は川柳五世の魚屋の段となる。

川柳五世は、俗称魚屋の金藏という。南茅場町の生れだが幼時両親を失い、佃島の漁師太平次夫婦に引とられ成人した。生れながら性謹直でひたすら養父母に仕え、その孝養ぶりを賞でられ、佃島名主の上申で文化四年七月、二十二歳のとき、幕府からその孝徳を表彰された。この年に江戸市中に「今世孝子鏡」の一枚摺りの角力番付風が出た。(もともと下半分は落首で、一種の擬装落書)その表彰者は四十五名で、「御褒美」は横綱が「白銀五枚一人扶置」金藏は「銀五枚」で、西方の小結格で「ゆき悴金藏」と大書され、肩書には「佃島勘十郎地借」の小文字がついている。その後、文政十年と、天保十三年の二回いずれも白銀三枚を賜り、天保の際には、一身にあまる風にひれふす川柳と詠じている。やがて表彰三度の金藏は水谷姓を頂き、水谷金藏を名乗った。

天保十三年は、いわゆる悪名高き水野忠邦の「天保の改革」が断行された年に当る。わが国未曾有の大飢饉といわれた天明大飢饉につづく大塩平八郎の乱、つづいては天保の天変地異の飢饉地獄と一揆打ちわしの続出、そのあとが天保改革である。この改革は、庶民にとつては開帖制限・寺社破却・仏寺葬式の

制限、衣裳、小間物、花火、子供のおもちゃから、初物その他の売物仕込みの儀相成らずという狂気の沙汰もいところの法令雨下の悪法が相次いだ。当然、巷にはこれを非難排撃する落首・落書・壁書きが氾濫した。しかし、金蔵はこの幕府の方針を体し「柳法式法」なるものを樹てた。

一、政事に関係りたる儀、何事に寄す句作撰致すまじき事

などにはじまる五条は、要するに句作に當つて政治・時事に関する批判・諷刺を禁じ、もっぱら敬神愛国・勸善懲惡を旨とすることとを説き、さらに「句案十体」を追加して具體的作句例を示し作法を定めた。ここに至つて川柳は完全にその三要素の技法を薄め、教化の具と墮落し、非文芸の形態を露出するに至つたのである。孝子表彰、銀下賜金を受けた金蔵の謹厳ぶりを如何にもよく物語っている。従つて五世狂句にやけに目立つのは詠史川柳の懲惡勸善、忠君愛国の推奨ぶりが目立つたが、五世川柳が唱道した「柳風狂句」は、四世の「俳風狂句」をその作句技法において否定せざるを得ない傾向を帯びた、とこそいえるのではないか。

五世の水谷金蔵は、四世を師とし、天保八年（一八三七）五二歳で四世より宗家を譲ら

れ、安政五年（一八五八）八月没七二歳であつた。初代川柳の純正川柳の文芸性を根底から否定し、全く別ものの短詩型を作り上げたのが狂句の名による四世と、更に一段と輪をかけて川柳の詩性を徹底して否定したのが五世川柳である。

五世は、緑亭川柳、水谷金蔵、魚問屋からするなまぐさの扱いをかけて初号腥齋仰り（たつくり）というのが五世の評者名である。広辞苑に拠ると、「たつくり」は（田作）で、農人。「こめ」の異称があり、田植の祝儀肴とある。また鰯類が田の肥料となることから、関東地方では（たづくり）という。

また、佃は（作田）の略であり、江戸佃島製の魚貝、海苔に醬油、みりん、砂糖で煮しめた食品を佃煮という。またこの他に佃節というのものもある。俗語で「吹けよ川風あがれよすだれ中の芸妓の顔みたや」また下座の雛子も指す——といった意味の説明がある。

こうみると、われわれ庶民の正月膳に「たつくり」があるのは、田作りと遊びの双方の意味合いがあることが知れる。右に述べた「たつくり」の異称「こめ」これが、五世川柳を引継ぎ、六世川柳の柳号にとりあげられているのである。六世は、五世金蔵の長子で父没後、六世を襲名するのである。

川柳四世と五世の評者時代、ともにこの兩人に大きな影響を与えた人物に、江戸戯作者でもあり狂歌師でも著名な柳亭種彦（一七八三—一八四三）がいる。彼は川柳四世と親交があり、多留にも序文を書いているが、五世に関する多留の序文（百四十六篇）では、誠直謹嚴、派手なことは一切嫌いな五世を少々持て余し氣味で、四世から五世への宗家のバトンタッチは「以心伝心」なりと書いているのは面白い。

五世川柳は「俳風柳多留」百六十七篇が天保九年刊を最後に廃刊したあとは、天保十二年（一八四一）「新編柳多留」初篇を刊行し、嘉永二年までに五十五篇を続刊しているが、識者の間ではあまり高い評価は得ていない。その原因は「句案十体」にある。すなわち正体・反覆・比喩・半叱・虚実・隠語・見立・隠題・本末・字響の十体がそれぞれである。「菓子屋落雁トンカタトンカタ」が、右の字響だそうでは他は推して知るべきだ。五世の辞世は「愛されし雅を思出に散る桜」五世川柳はとにかく生きた時世が恵かっただけで、初代川柳への文芸への想いは心底にわたかまっていた事は想像できる。

誹風柳多留廿六篇研究

(一丁)

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故岡田 甫

13 椎が本ト秋ハ御法りの船も見へ

八木 〓 椎本、御法、両方『源氏物語』の巻の名にみえる。椎本は、薫二十三歳の二月から二十四歳の夏までであり、いわば「恋」であろう。御法は、源氏五十一歳三月から秋までであり、この巻で紫の上が死去する、いうならば「無常」であろう。

「椎の木」は、またここでは本所松浦邸の椎の木であり、隅田川を吉原へ往復する遊客の舟と取り合わせた句が多い。「船」は吉野丸等の川遊びの船であり、秋の施餓鬼にはまた、川施餓鬼の船としても使われた。それを御法りの船としゃれたのである。

句意は、隅田川の河畔、松浦邸の有名な椎

の木辺からは、ふだん吉原通いの猪牙やら、川遊びの吉野丸やら「恋」の船が見えるのであるが、秋の施餓鬼の頃には屋形船が施餓鬼船に役目をかえて、「無常」の船として川を行くのが見えるのである。それを源氏の巻の名でまとめたキレイな句である。

小野 〓 「源氏」とまでは気がつきませんでしたが。

本多 〓 賛。小野氏と同感です。

多田 〓 賛。「源氏」の巻名を読みこんだ句一二。

椎が本浮舟で行くおもしろさ

四四・34

猪牙で吉原行き

御法から花ちる里で大一座

二四・36

はは木きをたまし花ちる里へ行四四・27甲

岡田 〓 賛。

14 おしい事無常の風になひく也

八木 〓 娘が若くして死んだのであろう。その遺品の小袖か何かで旗を作り葬式に使う。その後は寺の幛幡などにすることもある。旗や幛幡は無心に風になびいてゆれているが、それを見るにつけても早く死んだ娘のことが惜しまれてならない、といった句。

石田 〓 賛。この幡は仏教では、命過幡・薦亡幡と称す。

本多 〓 労働死であらう。

多田 〓 一般的に娘の早死を惜しむ句——もたらん振袖↓幡天蓋と結んで——と解しています。

岡田 Ⅱ 賛。

15 山では聞いてよみ野ではよんで聞き

八木 Ⅱ 小式部内侍の句かと思ふ。

「山」は、百人一首に次の歌がある。

大江山いく野のみちのとはければ

まだふみも見ずあまのはし立

『金葉集雑の部』、歌合のあったとき、中納言定頼は「歌はいかがさせ給ふ。丹後へは人を遣はしけむや。使はまうて来すや。いかに心もとなく思すらむ」と聞いた。小式部は引とどめてこの歌を詠んだという詞書が添えてある。

「野」は、また和泉式部と連れ立って北野神社に詣で、時鳥の絵馬をみて、小式部は、

鳴け聞かう聞きに北野の時鳥

君のみかげでたつた一声

と詠むと、絵馬の時鳥が鳴いたという。つまり、この歌は歌を詠んで時鳥を聞いたわけである。

鈴木 Ⅱ 賛。

一声は鶴にもまさるほととぎす

南 Ⅱ 賛。

北野へハ行行のをば居て吟し

五九・18

三二・12

聞て詠可きを式部ハ詠て聞

六三・8

多田 Ⅱ 小式部説賛。

岡田 Ⅱ 同。

16 勅使まてほきくとする孝の道

八木 Ⅱ 養老の滝を詠んだ句。「養老の滝」の

件で勅使が下向したが、勅使も滝のお酒を一
杯ためして、顔がほてつて来た。まことこの
樵夫、すばらしい孝行の道の模範である。

「ほきく」は、はっきりしない語である。

石田 Ⅱ 孫引きなれど「佐渡方言集」に、

ほきはき國方言 酒気の廻りはじめた感
じ。

本多 Ⅱ 『古事記』酒楽の歌曲に「この御酒は

わが御酒ならず。酒の長常世にいます。石立
たす少名御神の神寿^はき寿^はき狂^はし、豊寿^はき寿^は
きもとし」の歌謡がある。これから考えるに

「ほきく」は「心から祝う」といったよう
な意ではないか。したがって句意は、帝の勅
命で養老の滝の噂をたしかめるために下向し

た勅使が、そのまことなき奇瑞を知り、
厳肅なはずな勅使も、すっかり胸襟し心から
祝いたたえる孝の道だというのであろう。

多田 Ⅱ 「ほきく」については、石田説と思
います。

岡田 Ⅱ 賛。「ほきはき」、本多氏の説は貴重、

そついう前例があつて、佐渡の方言などに残
っているのかと思います。

17 法眼のすゝめ水イ干ン急ウに出来

八木 Ⅱ 「法眼」は、ここでは医師。「水干」

は、褌を便わす水張りにして乾かした絹。古
くは民間の常用服、後に公卿の私服。この際
は蹴鞠の衣装。

法眼のえらい先生が、患者に運動不足だか
ら蹴鞠でもやらない、と勧める。それで急
に蹴鞠の衣装である水干を作った。

法眼のすゝめでまりに御出精

明七・信一

多田 Ⅱ 賛。運動と共に気晴らしもあるか。ま
た殿が女色にふけりすぎるのでそのエネルギー
をこちらに向けさせるか。

岡田 Ⅱ 賛。

句 帳

(ポケット
サイズ)

一冊 百五十円

送料

百七十円(一冊)
二百四十円(二冊)

先人抄

PART II (完)

句集「私達」より

代筆と知らずサインを見せ歩き
牛を飼う隣りへきかす蠅叩き

耶谷光郎

二次会の割勘以来仲違い
貧乏の印肉までが干乾びる
授賞式代理つまらぬ顔でいる

永藤弥平

入水のここからさきはエキストラ
交際は致しませんが高い堀
湯上りのしぼんだ乳は出したまま

永松東岸子

半鐘がジャンと鳴るのも春のこと
いい知恵はないかと孫子借りて読む
湯豆腐の湯気の向うに妻の顔

永田六龍子

公務員だけでは喰えず灯を下げる
素足に浴衣宗右衛門町の午後
月を見る只それだけに粉をはたき

中松恒雄

録音は家族のすすりなきも入れ
山中節に浮かれ河鹿を聞き損ね
金儲けにならぬ古蹟は草が生え

西尾栗

一筆の富士は漢詩でうめ合せ
干し柿のあたりに夕陽まだ残り
初入選西陽さすこゝ位置にあり

西いわを

寺井鋭々

金を貸す方の背広が擦り切れて
金策へ靴を磨かぬ日がつづく
空壇を酔うてる方が忘れない

戸田古方

一冊二十円のとこにあった戦争史
気が合うてだまってまけた古本屋
和寇史は波がきかせてくれました

戸倉普天

半パンツ常務は鶴の様な足
あの頃の百円だよと念を押し
係りは居らんと新聞読みながら

友渕貴山

梅雨空に堺・長崎市史と寝る
中の島メーデーに行っただけの事
子等が読む貨車の長さへじつと待ち

富岡淡舟

大阪へ帰って橋をなつかしみ
一時間五分待たした怒りよう
PTAの役員でんね朝寝ずき
バチンコの負けが削った副食費
いつ死んでも悔なき程に邪魔がられ
過去帳に酒一すじに生きた父

土井文蝶

まだ早い早いとをんな泊める気か
嫉くよりも寝化粧なりとして御覧
気がつかれますわと若い亭主もち
子猫ぞろ／＼みな宿命の顔かたち
ストの朝古武士の如く馳せ参じ
聴診器昔昔の傷にふれ

中島生々庵

傲然と土蔵はなおも暮れ残り

長野井蛙

春の宵話本など出してみる

コスモスを咲かせて市営住宅地
名人の名刺も出さず帰るなり

西村 梨里

泣いて出た劇場前がまぶしすぎ
喰べて寝て猫の現実主義もよし
立て板に水の女にただ見とれ

西出 一栄

混浴へタオル一本たよりにし
手土産と思えば先夜貸した下駄
下戸同士申し合せて席をとり

西辻 竹青

脱税の儲けるよりも骨を折り
新課長机の位置を変えただけ
その方に逢わして呉れと妻静か

西森 花村

天と地の間をひよこ駆け廻り
春の水身投げのように椿浮き
巻物のように秋刀魚を猫くわえ

新岡 回天子

恋愛でもせねば陣笠名が売れず
トンカツになる運命を良く太り
雲一つなくて対馬の見えるツリ

野村 味平

丹前のまんま元日撮される
淀川の広さになってドグロ釣れ
老眼は襦袢の先でぬぐわれる

丹前の紅一点は吞まされる
三面鏡買いませぬのにあけて見て
ランドセル辻まで送る癖がつき

野村 初甫

組は白く乾いて妻の留守
正直がすぎて辞表を書かされる
御用心下さいそんな犬を飼い

野本 吞水

駅長を一人残した春の汽車
飲むだけの義理はあとからついて行き
栗おこし配って旅の疲れが出

浜田 久米雄

春だソレツ記者は動物園へとび
たこ焼の灯から大阪昏れかかる
棺桶が労働基準法で焼け

早川 清生

葉の落ちた音も火鉢で聞いている
草の名も知らず喰うこと教えられ
悪人になれず倉庫の番をする

橋本 緑雨

春雨もH₂Oにvariなく
墓地移転跡に観光ホテル建ち
ソプラノで怒りアルトで愚痴を云い

服部 十九平

一人旅向いの席も箸を取り
肩書きが取れた身がさ梅を干す

長谷川 三司

矢印の通りに曲るモーニング
勉強しや夜学に通う子もあるで
時々旧姓も出る妻の客

長谷川 迷路

大臣の名刺は別に扱われ
老境への一步が針に通らない
西瓜かかえて子の体重を考える

姫田 夕鐘

大阪へ苦勞しに行く終列車
当用漢字お経どうにもならぬなり
実直を買われただけの辞令なり

弘津 柳慶

折詰を開けば妻は値ぶみする
香具師の蛇動かぬままに暮れてゆき
春の日はポカポカ自転車盗まれる

福田 妄夢

蛙なけなけやがて埋めたてられる池
お花見は酔うて踊ったまでは知り
官軍が出てくる祖母の誕生日

深見 雅堂

委員長戦陣訓を読む如し
ワンマンのボタリ椿のように散り
外務省スパイも飼ってでんと建ち

藤本 満年

二日とはもたぬきのうのわが怒り
投売を値切ればあんだ去になはれ

福島 鉄児

慰謝料は貰いまっせと荷をまとめ
盃をためたまんまで座を外し

福田 丁路

原爆で死なば諸共などと呑み
教壇を捨てて儲ける気にもなり
存在を示す咳とは気がつかず

不二田 一三夫

拌み屋と医博の診たて同じなり

三流館夫婦仔犬を抱いて来る
サーカスへゆけばよかった出前持

藤井 春日

汚職とはよもや言うまい受けて置き

紙芝居郷土訛りでやってのけ
お遍路の杖も花咲く方へ向き

古川 魔花麗

あの頃の夢とは別なYOU AND I
虫でさえ会えるに俺はなぜ逢えぬ
風向きが悪いが女将座を外し

逸見 灯竿

歯を抜いた事も葉書の端に書き
僕の行く鼻先へ来て羽子をつき
親馬鹿の話の聞いて教師去に

本田 恵二朗

妊達に映画批評でへこまされ
御降嫁でわしが国さの自慢ふえ
洋食に関する限り嫁まかせ

正本 水客

竹の皮冬の音して踏まれたり
船大工太古のままに火が赤し
船一つ冬の景色を寒くする

松川 杜的

山の橋カメラの友を呼び戻し
水族館カッパもいるかと子に聞かれ
茶柱へ還らぬ友をふと思う

丸尾 潮花

ひと房の葡萄の如く長女いる
かき船の障子もあかず冬の底
兄さんでいてと淋しいことを言う

益永 貞女

注連縄の奥に天平漠とあり
母の春まるくやいとの灰こぼれ
ビジネスへ女らしさをすり減らし

真鍋 一瓢

シグナルは青だそれ行け子沢山
十一貫の妻が健康法を説き
いいなあと水の流れを見てるなり

松江 梅里

医者のない村にもパンコ屋が出来た
失恋をしたか彼女のかもいわず
アルバムに母は十九の春を持ち

前山 北海

皇太子と握手女優に出し抜かれ
銀行が生家の跡にいかめしく
子の齡をいちいち妻に聞いて書き

松下 京一樓

ベン軸の尻で受付小窓あけ
垣根から何をお植えかとは日曜
こんな子にしてはならない記事をよみ

松村 万古

母怒り父慰めた通信簿
朝酒が楽に飲めるも汽車の旅
卒業へ親は心配変えただけ

三鴨 美笑

どこに居た雀か焦土とんでをり
急用の電話は犬が居らぬとか
誰の子かなどと田舎はせますぎる

水谷 竹莊

おめでたへ月賦づくめでととのえる
貞操を売ればすむわとふてくされ
万引の哀れ子供のをとり

水谷 谷水

墓動くほどな出世がしてみたい
十二月誰か故郷を思わざる
しりうまにのらにや資本家側にされ

宮田 不二

教室の窓へ小使さんの猫
水屋の旗だけ夏がまだ残り
入場式負ける気配はつゆ見えず

村上 ゆづる

肩書が変り役得また変り
サインコサインそろそろ親に口答え

音のせぬように生きてる老夫婦

牟田一哲

本省の収賄証拠不充分

寒がりに見せてやりたいストリップ

割箸を割らずに帰る親父振り

森本法泉水

積んで置くだけの経済雑誌来る

何時売れるのか骨董屋飯を食い

また一人癌の話に割り込んで

森文夫

交際費だけでは足らぬ恋になり

値下げ記事もう期待せぬ小市民

商用で来た町雪見酒になり

森下愛論

巻紙もほんのり匂う京言葉

スター入院看護婦は嬉しがり

釣銭はいいよと言えぬ世となりぬ

安岡珊枝郎

寝息かすかにもれてるような釈迦寝像

満月も年々煙臭くなり

札附きの落選みんなほっとする

山田季賛

地方版僕の句もある日曜日

酔うている証拠背広に春の泥

車窓から見える田植は楽しそう

山口秋花

どうかなるこんな気持が家出さす

油断して居ればトラック子を殺し
そわそわと自由違いの子を孕み

山川阿茶

次点ならまだ挨拶はあるけれど

男皆阿呆に見えて売れ残り

おひらきにコンバクトのいる顔となり

山本葉光

神国にまたなりそうな初詣

身の程を知って笑ってくらします

指定席笑わず泣かず拍手せず

八木摩天郎

計画課他人の土地へ線を引き

情熱の歌人晶子を思う海

敗るとも奈良にはふるき仏たち

若本多久志

天守から昔殿様見た桜

お帰りは虎の尾を踏む押ボタン

住吉さん一ヶ所だけへあげておき

岩崎柳路

冷蔵庫中をのぞいて一つ出し

安治川へ石炭の船芋の船

いざ参るぞと阪妻は斬りはじめ

笠原路生

六角堂幾何学的に暮れて行き

ライオンは何を小癪な顔でいる

君の指アスバラガスに似て細し

関本雅幽

抽出へ財布投げ込み淋しき夜
藍の香の無きふるさとなりにける
臍状をもう一つ取ろう丙午

高橋かほる

大阪は轢れかけてもよい所

元日の足袋は着物の上に乗る

極楽へまだあの人が来てくれず

長崎柳秀

溺れたるかたち空瓶沈み行く

十人は楽に死ぬると匙を見せ

上かん屋お客お客へちがう世辞

西田艸楽

凡人の証拠ふり出しから慌て

食堂の鏡三人俺が食い

見送ってその五分刈を眼に残し

福田山雨楼

信仰するどころかヤソを批判する

エロ座談うまい市長でまた出され

時代の差子規よりうまいものを喰べ

村松夢裡

金つまりどすえぶつつり御越しなし

戎橋飲まして欲しい人に遇い

恋愛至上なに六十の遅からう

米本貴志子

天下る嫁へ湯殿の模様がえ

鉄瓶のたぎる我家へ退院す

やればすぐ返えすお人に肩が凝り



正本水客選

今治市 矢野佳雲

負けて勝つ氣が二人いて大笑い

通る人へ吠えて忠誠見てもらい

余生という字は青春と読み替える

トタン板で廻すと響く夫婦独楽

放つとかれるのでやる氣を出してくる

高槻市 竹内花代子

しじみ汁今日一日の夢がある

バックする間ブザーは無視しとく

お茶室のくぐり戸示すわらびなわ(冬の京)

寒々と楓ちぢんで苔へ落ち

宝篋院 小笹は風にさからわず

松原市 本多洋子

春めいて工事現場の音軽し

豆投げて逃げる鬼なら優しかろう

あれは皮肉で云うたはるなとひっかかり

もし落ちたらどう云うてやろ子の受験

熊本市 有働芳仙

ブランコに暫く過去と揺れてみる

まじろぎもせぬ人形の瞳が眩し

微風でも直ぐ歌い出す風車

茶代りに水割りを出す妻の留守

今治市 渡辺南奉

計算通り事が運ぶと恐くなる

凡人の凡人らしいところが好き

太陽が沈むと人に逢いたくて

ジープで二十歳が戻るなら穿こう

泉佐野市 大工静子

庭手入れ喧嘩相手に妻を呼ぶ

目立つため嘘を並べた面構え

のんびりとあくびと共に声が出る

持って出た紙一にぎり棄て場ない

青森県 波ただお

雪下ろし屋根から挨拶交わしてる

世渡りが下手で今朝も番茶飲む

どう見ても読めぬ賀状も混ってる

黒髪を見ればアデランスかと思ひ

米子市 野坂なみ

ゲレンデに合格の感激ぶつつける
自叙伝に亡夫が出版を問いかける
便箋に思慕したためて墓に埋め
何となく他家に幸せありそうで

高知県

松岡三吉

一長一短わたしは神でありません
子は宝馬鹿を承知の親でいる
四季知らぬ果実が都会の駅につき
正月が過ぎてくらしの顔になり

西条市

片上明水

告白をすればブツリと切れそう
日本人握手をするときすぐ信じ
嘘だけを話の中であてにする
課長からいやな台詞をたのまれる

京都市

松川芳子

外出が続いて母の高軒
母老いて過去の思い出糧とする
悪声をテープ確かに知っている
恋多き女自叙伝書くゆとり

島根県

星野侑正

さりげなく笑うた筈へ座が白け
春一番吹いて病人にある安堵
ご機嫌と知れる社長の出雲弁
警官の制服脱いで酔い給え

島根県

東原福子

老婆心だったと喜ぶことにする

ただ青くありたいばかり冬の草
雪の道スタスタ歩く寒行僧
目鼻立ち美しいのでなお哀れ

岐阜市

市川鱗魚

サングラス余罪をかくす顔にする
紅白に置くとカマボコ貌になる
薬包紙何時まで翔べぬ鶴を折る
何時も矢を受ける男でどまん中

堺市

田辺哲寿

肩書のない名刺まで差別され
忘れたい事多過ぎてコップ酒
失敗が受ける素人の隠し芸
言い足らぬ分だけ酒を注いでやり

兵庫県

円増貞子

そう言えば似た者どうし老い二人
椽の猫が出迎えてくれる嫁の里
バス停をさびしく離れる待ち呆うけ
老いの身のひがみと打ち消す日が多く

名古屋市

鈴木可香

率直に認めて上司目を閉じる
船板を看板にして天ぷらや
老人ばけ防ぐ一つに好きなみち

男湯から子に石鹼を取りにやり

兵庫県

野々口ゆう也

俺に似た人間いるよ猿の私語
窓開けて風に聞きたい事があり

老いの孤独逃れるコーヒー熱くいれ
年嵩という淋しさと知る上座

大阪市 杉本智慧子

困った言葉にすれば嘘になる

時差ぼけに熱い梅干茶がうまい

鈴なりの絵馬 神様は大いそがし

鳥取県 武田照子

墓そうじしてから姑がしゃべり出し

豪雪に夫戦う身ごしらえ

己にも人にも優しい子を案じ

兵庫県 中田白李

誰か来ないかなあ満開の梅の鉢

口数の少ない妻で物足らず

似たような柄着てあの人よく似合う

旭川市 朝倉大柏

ピサの塔みたいに酔歩灯を泳ぎ

塩壺に愚痴など詰めぬ母達者

慰める友と飲んで酔いきれず

名古屋市長 越村枯梢

同年の友の計をきく適齡期

散歩道 和服の似合うひとに会う

幸せをポッケに口笛高く鳴る

神戸市 久保禎三

小正月しかと異郷に小豆煮る

上陸へ先ず椰子油の香が身を包む

台湾の家鴨ぶら下る店並ぶ

明るさの故に冷たき冬の月

春を呼ぶ雨なら濡れて行くもよし

じやがいもの どれもかわゆく見える日よ

高知県 赤川菊野

まだ足りぬ言葉 握手でたしかめる

冬景色 似合う男でだませない

便り待つ郵便受がぬれている

鳥取市 森田熊生

マイペースこつこつ朝の靴がなる

まちがいの電話も同じベルがなる

二日酔いというもつたいないあくび

大洲市 米沢暁明

白魚の指じゃピアノは弾けません

二十円の葉書もこれで書きじまい

シャッターへ帽子のひさしあつち向け

岸和田市 福島せつ子

好きなこと明け暮れでできるありがたさ

舞妓さんといっしょに鬼も豆をまき

冷えた海からメバルが春を告げにくる

豊中市 満仲きく子

光はもう春のものです針供養

梅だより重いコートよさようなら

笑うてはならぬ所で笑うくせ

尼崎市 中谷利美

老夫婦入院ごっこ繰り返す

責任はとつてくれない神仏
ふところが温いと人相まで変わり

大阪市 溝 渕 美紀子

粉雪が旅の孤独を演出し

旅に出て風の音聞くゆとり持つ

母が来て都会の食卓田舎めく

東子市 小 山 悠 泉

長生きが仕度し青竹踏んでみる

卒業へ娘の釣書を用意する

誘惑をするぞと招くネオンの灯

鳥取県 羽 津 川 公 乃

早起きの鶏 祖母と私語交わす

騒音の中で孤独をかみしめる

出世した男ドラマを脚色し

兵庫県 森 脇 和 子

夫々のタクトで朝の幕があく

雄弁へ里のなまりも一寸出る

腹這いのパパへ笑顔の子がもつれ

喜屋川市 稲 葉 好 子

国鉄は雪の重みを抱え込む

ひとり寝のかぜに親しくされ過ぎて

仏さんと雉煮いただくお元日

八尾市 高 杉 千 歩

にらみっこしましょ二月の鬼さんと

粉ゆきを走りまわって掌にうける

逃げ道に鬼の忘れた鈴ひとつ

粉雪に花芽がぬれて春近し

受験どき我家は漸く他人ごと

大阪市 横 山 静 子

補聴器で都合よい音選り分ける

画用紙にやさしい顔のママがいる

米子市 桑 原 伊 都

賽銭で神も景気を知らされる

下張りの手紙が歴史ときほぐし

米子市 菅 井 未 知

床の間に残った席へ座らされ

反対は反対 酒を酌いでやる

新潟県 高 野 不 二

子の背より期待の積木高く積む

上司ともなれば笑いの使い分け

松江市 福 間 芳 枝

雪女 雪に生れて雪に消え

霧の沼 小魚が跳ねただけの波

倉敷市 中 島 彩 平

精一杯頑張っていますと云う若さ

仏壇の灯りで母のあるを知る

松原市 佐 藤 藤 子

馬鹿みたいに意地で動いた頃恋し

母たのし雀に餌をやり話しかけ

八戸市 島 田 昭 治

玄関を出るまで女身づくろい

山口市 高 崎 喜 一

足元に春を伝える波の音

岡山県 池田半仙

此の家の家風と違う床の軸

大根足ブーツ張り裂けそうに見え

和歌山市 坂部紀久子

反省をしても償いにはならず

好ききらいあるからカッブル出来て行く

大阪府 堀口欣一

球場へ電話のかかる忙しさ

ふるさとはいいな焼鯖いまがしゅん

榎原市 西本保夫

囑託の知恵を借る日へ呼び出され

囑託のここなら言える社の食堂

大阪府 小谷清女

奮戦の猫は名譽の髭を折り

天井のねずみ平和な音で駆け

大阪府 吐田公一

賽銭箱凡夫が覗く残り福

定置網手繰る手許に雪積る

大阪府 橋元美恵

淋しさに身がまえる帯かたくしめ

この心どこまでもどる冬の旅

西宮市 妹尾春江

すんなりと禁酒の夫がいとおしい

心よい疲れ残して孫は去ぬ

交野市 山本テルミ

孫が寝てみんな小さく居ることたつ
年とともに円満になる老夫婦

唐津市 木塚素石

還暦で小さな城に満足し

見栄で言う悠々自適淋しかり

尼崎市 中辻千子

言い合いの友の親しさ嬉しくて

北陸の雪の明け暮れ思いやる

岡山市 原田凡太郎

また雪が降る降る津軽あいや節

人様の目にはいうことない娘

岸和田市 吉水照江

年寄りに歩幅合せて孫あるく

糸巻へ孫の手をかる掘炬燵

島根県 岩佐富子

雪しんしん便り書こうか詩書こか

今日もまた無事に歩いて一里塚

鳥取県 和井観洋

雪どけの道を駆けだす春のうた

故郷に旧正月がまだあった

米子市 青戸美佐

真剣に少年初の神事舞う

最良の日のレーガンの紙ふぶき

倉吉市 田民碧水

母呼べどあたり寂寞 雪の中

蓮の座に父と母との夫婦雛

雪片へ沈黙考 椿の朱
青春は短篇小説として残す

鳥取市 中 森 葉士人

傷心の友よ雪どけもうすぐだ
トラックに社長乗りこむ張りきりよう

大阪府 大 野 武 太

一徹な父だが他人の世話が好き
土いじり春の匂いを肌で知り

兵庫県 奥 野 テ ル

度のきつい眼鏡で二浪まだ続き
月曜の朝かろやかにみがく靴

大阪府 藤 森 小 雅 子

此処からが怖い歩道の無い夜道
賢沢が膨らんでいるゴミ袋

寝屋川市 立 床 晴 風

日々新たなそんな生活を夢に持ち
接待の笑顔に頬が疲れ切り

米子市 寺 沢 み どり

小休止 明日の敵と握手する
アドレスも忘れほのかな人となり

島根県 松 本 文 子

麻痺の子の紙持て余し折りきれず
先生へ野菜がとどく過疎の朝

米子市 田 中 亜 弥

もどれない二人で決めたきつい道
和歌山県

天 満 三 千 代

明日という望みがあるから生きられる

今治市 新 居 田 胡 頰 子

どん底を紙めた明るい人間味
平凡という幸せに愚痴は無い

米子市 雑 賀 美 世

あと少し生きるつもり模様替え
暮れてから老女ひとりの夜が長い

唐津市 浜 本 義 美

病窓に凍りつくよな星の冴え
釘入れの古さがものをいう大工

大阪府 村 上 喜 代 美

春の磯かにの親子の話し声
孫はめられて安請合いをしてしま

大阪府 鍛 原 千 里

旅人よレールの向うに春がある
蜜柑むく仕ぐさに女を見させている

兵庫県 藤 原 捷 一

想像は我が特権とも言えるなり
外灯が背から うすら寒い道

米子市 政 岡 日 枝 子

死火山と思える女にある妬心
もう白紙に戻せぬ言葉をにがく噛み

大阪府 岡 田 ふ み

じいちゃんの相手はテレビに任しとく
正月が済んだら元の二人きり

大阪府 田 口 な り こ

湯上りの鏡に捨てるものがある
お父さん長生きしてねと豆数え

大和高田市

岸 本 豊平次

齡の功とおだてて知恵を借りている
同窓会老いても癖を持って寄り

大阪市

白 石 潔

豪快に呑んではいるが泣き上戸
汚れた海 鷗の怒り聞こえてる

青森県

岩 淵 一 星

ふとん地を買って実家の母を呼ぶ
専門に診せろと初診料は取り

橋本市

岩 倉 天 彦

格言を貼って進学灯が更ける
悪友とネクタイゆるめ妻の愚痴

愛知県

国 分 甲子郎

うす味に十舌十味と頑固者
モーニングサービスの喫茶すみが好き

大阪市

平 井 露 芳

月夜がに自分の影が怖くなり
書留ではるばる着いたお年玉

尾鷲市

渡 辺 伊津志

良いことが続々小鳥のよく来る日
母に出す手紙切手の柄を選ぶ

唐津市

仁 部 四 郎

銃弾の細工も売れる那覇の街
沖縄の海美しく嘘のよう

春風の軽さへ散歩の背を伸ばす
羽根ひろげ小さな欠伸する小鳥

大阪市

津 山 刀 水

倅せのドラマが満ちてる仕舞い風呂
何の約束をしたか二次会から帰る

鳥取県

加 藤 茶 人

増税を決めてお国は無駄ばかり
お座敷は儲けばなしの酒になる

唐津市

桑 原 掬 治

一夜明け夫婦ボタンを掛け直す
派出所の庭に雀の親子いる

浜田市

佐 々 木 裕

子の祈願終えて梅見の人となり
山焼いてハイウェー春の化粧する

唐津市

浜 本 久仁於

鹿の声 襖をあけて確める
豆を撒く声が聞こえてまだ素朴

兵庫県

山 根 左 春

滲み出る素直な若さに恋をする
白梅が寒護摩供養の朝に浮く

大阪市

西 村 芙佐女

畦を来て雲雀を空へ追いやりぬ
想い出も一緒にたたみ込む晴着

羽曳野市

麻 野 幽 玄

道草の夜道で星に笑われる

大阪市

林 ひろ子

埋もれたまま凡人で忘れられ

大阪市

山本 炉 斉

満腹の上にデザートよく食べる

岸和田市

藪野 けい子

注連縄を神社で焼くは老いの役

跡継ぎのない職にいて冬佗し

岡山市

松本 元 江

一年を秘めてカレンダー壁にあり

西宮市

山田 喜代子

雪の日の春を探してバスに乗る

大阪市

岩田 八文 銭

晩酌がくどくどなって亡父に似る

鳥取市

武田 帆 雀

ひなびた湯ふと亡妻を想い出す

島根県

岩田 三 和

太い声 美人の顔がくずれてき

東広島市

石井 さわ子

旗ふれば列車が止まるそこが駅

唐津市

田口 虹 汀

回復と平行線の句が生れ

倉敷市

大森 登 竜

仲良しの儘で別れた手の温み

唐津市

山下 勝 一

不整脈の妻を残して月詣り

岸和田市

津田 千 舟

負けぬ気で彼奴俺より先に逝き

倉吉市

今村 夕 路

良い着物を着て女は小さくいる

今治市

八塚 三五 島

負け犬は後振り向かず去ってゆく

兵庫県

藤原 捷 一

愛冷えて互いにかけて保険金

弘前市

田口 叶

片思いかも知れないと編みつつけ

岡山市

串田 句 味 地

すき腹をいらいらさせるよな匂い

東大阪市

三宅 哲 夫

梅園の空黒まりて雲舞い

奈良県

宮川 古 都 路

夢に見た思い出たぐるふるい糸

★

三原市

戸田 富 久 子

つばめの巣 共働きの親を待つ

和歌山市

堀端 三 男

妻と女のけじめをつけて一人旅

岸和田市

雪本 二 三 子

水仙の香り手に満つ初稽古

水煙抄の選がまた廻ってきました。2月号で好郎さんの

選と発表されていたので安心して台湾一周の旅に出て、

26日夜帰阪すると水煙抄の原稿が届いていて吃驚しまし

た。旧知の懐しい名前、新しい方々、四月号から一年お

互いに全力を挙げて頑張りましょう。

正本水客

愛染帖

橘高薫風選

等岡市 木山 遠二
お願いはせずお賽銭はずんどく
老いはよしにここにすればそれでよし
佳き男嬉し涙を流したり

島根県 小砂 白汀
黄金の壺が傾き風花す
葉わさびの辛おだてに乗り易し
弱くなった証おとこが紅を着て

青森市 工藤 甲吉
参議員二番煎じを飲み下し
日本にふえる長寿という地獄
許されるものに見上げる顔があり

高知県 松岡 三吉
安らぎは下駄を揃える妻と居て
よい嫁であつても母はひとり住み
危篤まで帰らないのはみな男

新潟市 黒川 紫香
日照権老樹ぞ知らん顔をする
善人の鬼は拾つて豆喰べる
今治市 矢野 佳雲

自己紹介などで切口見せられず
障子ピタリと冬の陽がつめてある
寝屋川市 江口 度

お化粧長いとき機嫌の良い妻よ
引き出して解えるひよこに土がない
鳥取市 河村 日満

何葉の根性雪に鍛えられ
すこしずつすこしずつ積むエゴイズム
倉敷市 田垣 方大

秀才へ人間の血が減らされた
指先が硬直しそつな字に出合い
倉敷市 田民 碧水

曼荼羅図父と母とがかわします
降る雪に別れの列車薄れゆく
八尾市 高橋 夕花

さよならのふところ深く雪が降る
無性に淋しく郵便函をまた覗く
三重県 坪田 冬花

大凶の札が重荷の梅の枝
黙秘権その時孫からの電話
大阪市 江城 修史

己れいとしく己れに尻尾振らせない
想い出がはじまる慟送る時
兵庫県 辻 文平

風糸を手繰りつつ聞く天の声
流れ星てんでん神の手がそれて
米子市 八木 千代

傷ついて春を急かない冬木立
ゆびしやぶり人間様も猿さんも
守口市 羽原 静歩

和泉市 西岡 洛醉
雑魚一匹今日終電の椅子に居る
松江市 舟木 与根一

観楽街つぎつき歳を思い知り
高知県 赤川 菊野

ツワの里脱藩志士の碑と暮れる
米子市 石垣 花子

平和論本音は舌の根にからみ
富田林市 岩田 美代

悪友が寄れば二ヶ月ぬくつなる
大阪市 大野 武太

学歴と云う正札をさげている
京都市 山本 規不風

おやすみが素直に言える受験の子
信じない易だが訳を聞いてやる
京都市 山口 弘生

一盛りのリング全体主義みせる
大阪市 河野 君子

春の風仰臥のころ弄ぶ
西宮市 朝山 千世子

千代の富士沈む世相をかき立てる
名古屋市 越村 枯梢

俺もいる野積みになれたボンコツ車
和歌山市 松原 寿子

闇抜けて独りに還る子守唄
和歌山市 西山 幸

父の灯も母の灯も消え闇ばかり
倉吉市 奥谷 弘朗

親の味三年くれた子を思い
島根県 西村 早苗

交叉点おんなふわりと酔った足

高槻市

田崎 あき子

連れ糸解く楽しみが亡母に似る

西宮市

妹尾 春江

引退の鬚落すときドラマなり

鳥取県

鈴木 村諷子

迷い児の俺を探しておられます

兵庫県

遠山 可住

毛皮着る寒さなかなかやってくる

兵庫県

野々口 ゆう也

なんとこの勲章妻に五十の賀

岡山市

川端 柳子

あんな夢こんな夢あるアドバルン

出雲市

板垣 夢酔

気にかかる袍を尻に敷いて飲む

京都市

松川 杜的

落柿舎の隣で賑わっている御陵

和歌山市

浦野 和子

海風いで銀波極まる瑠璃観音

高槻市

若柳 潮花

両親を中に子供にある派閥

岡山県

嘉数 兆代賀

明日を指す指が霞の中にある

和泉市

岡井 やすお

春が来た帽の徽章も輝いて

境港市

竹本 寿子

中流の意識妻を君と呼び

米子市

小西 雄々

近道をする知恵かりる金を積む

東大阪市

三宅 哲夫

アップダウンしつゝ何処へ行くジャバン

丸腰になつて庄助雪の朝

兵庫県

仲井 素水

のし袋金釘流も受付ける

唐津市

仁部 四郎

家紋だけやつて次男を分家させ

岡山県

池田 半仙

心配なカッブルを見た喫茶店

堺市

高橋 千万子

色あせても思い出を抱く紙人形

米子市

青戸 美佐

愛があるだけでは食べてゆけません

豊中市

満仲 きく子

給料袋一K地点で止つて

鳥取市

武田 帆雀

アメリカも妻はテレビで済ませた気

大阪市

吐田 公一

何かある男は何もしやべらない

唐津市

岩崎 実

ぼたん雪舞う舞う灰神楽のように

鳥根県

堀江 芳子

雪が舞う独り居るとき空凍る

鳥根県

堀江 正朗

風が出てお岩になった水鏡

西宮市

野呂 鶴汀

孫達と住みたい欲はまだ捨てぬ

宝塚市

吉田 笑女

歯車を合わすタクトは孫が振り

兵庫県

円増 貞子

福祉福祉だんだん舌がもつれかけ

奈良県

森田 カズエ

春浅く鳩と朝日の中に居る

尾鷲市

渡辺 伊津志

万両のたわわに実り倒産す

鳥取市

両川 洋々

合理化へああ雑兵の席がない

大阪市

横地 雅風

地下足袋がさつそう市税を納めに来

和歌山市

若宮 武雄

拍手喝采真にうけているその姿勢

大阪市

杉本 智恵子

ダウンベストさなぎのお化けのように着る

青森県

五十嵐 操史

人間の笑い猿には真似られぬ

今治市

越智 一水

軍拡のタカ血税を食い荒らす

東大阪市

竹中 綾珠

つくばいの水も寒には冷めた過ぎ

岡山市

井上 柳五郎

菜のみゆつくり効能読みなおし

浜田市

佐々木 裕

梅一つ白湯に沈めて妻と居る

鳥取市

中森 葉士人

盛運は五月と知つた尾をしまう

米子市

政岡 日枝子

素晴らしい虹を背負うて父帰る

大阪市

欄 蘭

天眼鏡に顔のしわまで読みとられ

鳥根県

大野 酔夢

雑音に堪えて子一人母一人

唐津市

浜本 義美

新築が病状よりも気にかかり

神戸市 二世歌う昔恋しい銀座の柳 久保 植 三

寝屋川市 来る春へ鉢の桜も身構える 宮 尾 あいき

大阪市 伸び放題の生垣の内に佳人棲む 白 石 潔

東大阪市 表札は家族全員雅号まで 市 場 没食子

岡山市 同権を夜店のように並べられ 原 田 凡太郎

大阪市 戦争を知らぬ男の防衛論 藤 森 小雅子

八戸市 恙なく越年明るい視野抜け 小 泉 紫 峰

富田林市 肚芸が空振りになり父の咳 中 村 優

貝塚市 花道を惜しまれて去る貴の花 行 天 千代

兵庫県 よく来たと鈴に伝わる神の声 速 水 房子

大阪市 初心がむちうってくる夜の本 小 野 風 童

鳥取県 深深と降って男の戦かな 和 井 観 洋

米子市 巾きかすボスこまでも養老院 野 坂 なみ

米子市 哀抱いて琵琶の挨拶すさまじく 佐 伯 越 子

大阪市 残照に干しいか衰しいシルエツト 村 上 喜代美

和歌山市 福 本 英 子

北向地蔵へ猫柳の二三本

大阪市 遭難者山の魅力に甘え過ぎ

米子市 車椅子労をいとわぬ母が添い

京都市 雪を踏み音春の遠い音

岸和田市 夢かない息子と呑める酒の味

唐津市 まねき猫その横に置く金の鶏

岡山市 咲き初めた梅をくらしの心とし

米子市 二次会へそつとルージュをひき直し

鳥根県 あじさいの押花送る過去の人

松山市 満開の桜自由に目にうかぶ

柏原市 剃刀よ浮気の傷跡刺れるかい

鳥根県 菩薩への年輪重ね背が丸く

今治市 また十円さし込んでいる赤電話

岸和田市 冷え切った子の手を母の手が温め

岡山市 弾む日の心静める水鏡

岡山市 病棟の一隅さむし尿コップ

小 谷 清 女

雑 賀 美 世

都 倉 求 芽

古 野 ひ で

山 下 勝 一

串 田 句 味 地

米子市 田 中 亜 弥

鳥根県 梅 みどり

松山市 谷 真 風

柏原市 志 野 翠 峰

鳥根県 高 見 鐘 堂

今治市 八 塚 三五島

岸和田市 清 野 こ う

岡山市 直 原 七 面 山

岡山市 出 原 敬 一

今治市 ライバルへ研ぎ澄ましてるうし指 新居田 胡 頼 子

鳥根県 屠蘇を注ぐ二女と三女に形だけ 角 耕 草

東子市 奥信所のように道連れ聞きたがり 小 山 悠 泉

岸和田市 神前の孫の仕草を写しとく 原 さ よ 子

唐津市 霊柩車送る黒衣に震降る 田 口 虹 汀

羽咋市 猫の恋大無関心に通り過ぎ 三 宅 ろ 亭

山口県 ゴルフバッグ持って紳士になった顔 高 崎 喜 一

鳥取県 来て上げた貰ってやった夫婦仲 羽津川 公 乃

三原市 晩年に期待をかけて陽を仰ぐ 戸 田 富 久 子

兵庫県 通勤農都会の彩を山はだに 酒 井 正 純

八戸市 泣き上戸知らぬで酔いでもて余し 島 田 昭 治

兵庫県 干柿の甘さに母の味がする 森 脇 和 子

米子市 パーゲンの群を離れて妻を待ち 菅 井 未 知

岡山市 主義を持つ女の道は厳しすぎ 稲 岡 正 之

★ 投句先 千 500 豊中市中桜塚三丁目13-15

橘高 薫風(ハガキに三句)

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

大矢 十郎

労働者だから生徒に殴られる

田中 叶

厳しくそして哀しい句。こんな事が日常茶飯事の現代社会。悪いのは生徒か先生か、それとも家庭なのか。この句の場合「労働者だから」と自暴的な諦めが切なさを訴えている。ロマンスは母にもたしかあつたはず

片山 明水

人を愛せぬ人は不幸だという。良妻賢母としてロマンスは別のもの、それを如何に秘め、如何に温めたかは子の知る由もないが、愛は素敵なもの。母にもあつたはず、あつてはしかなかった。

元日と云うに仕事の夢で覚め

大野 武太

日本人の勤勉さを如実に現わしたような句だ。晦日まで働き通したのであろう。誰しも経験する事だが作句に見逃す元旦の目覚のひ

と時がやるせなくも面白く表現されている。盲点があるから可愛い妻である

越村 枯梢

育児や家事に追われている主婦にとっては盲点があるのは当然の事だが、此の盲点が世の夫君達にとっては好都合で可愛いものなのである。

辻褄が合えば合うたで妻不安

矢野 佳雲

前句の妻と比べて、年令の差であらう。更年期の女性ともなれば何かにつけて疑心満々である。辻褄を合わす事に余念のない夫の心労の程が思いやられる。

本当の親切口になど出さず

津山 刀水

他人の親切は口先で十分だが身内ともなると金品態度で示さねば親切とは思われない。此の句の場合、後者に対するお世辞めいたアドバイスへの反感であらう。

色眼鏡はすせば心見すかされ

小谷 清女

目は心の窓というから、色眼鏡をかけた人の心は不可解なのである。故に不信感を抱かせるのは否めない。眼鏡の奥の疑問が聞かれた時、その善良な心が親わしく見透かされたであらう。

ひとり居て一人だけなるわたばこり

武田 照子

のんびりとした句だが、一人暮しの女性の細やかな神経がこんなところまで行届いている。布団の上げ下ろし、衣類の着替えによる

綿ぼこり。男なら気付かぬ事だらう。わびしさにつかむ電話も話中

松本 文子

話し相手のいないわびしさのひとつときであらう。心の悩みを打ち明けられる人、相槌を打ってくれる人への、縋りつくようなダイヤルの後の溜息が伺える。

きつかけを知っているからばけて置く

堀端 三男

いさかいには、きつかけがあるものだが、そのきつかけを知っている第三者にとってはこうなるものと予想していたのであろう。かわりを持たず「ばけて置く」が面白い。

十大ニュースに迄さわがれる拾いもの

高野 不二

十大ニュースにさわがれてもよい拾い物である。此の不景気不確実な世に例のない拾い物ではあるが、拾った事よりもその落し主の現れない事が何とも不思議な出来事であった。ひとり言一步退く父淋し

開村 武市

ひとり言の中に体力気力の衰退が感じられる。旺盛であった頃の父を思う時、こんな父ではなかったものだがと、一抹の淋しさが、父への思いやりとなって現れる。

和の中に生きて夕日のすばらしさ

天満三千代

心温まる句であり安らぎを感じさせる。人情の中に暮れた一日の夕陽の素晴らしさは又格別であらう。気持よく一日を振り返るひととき、明日も又素晴らしい夕日であれ。

春のさきがけ

第28回 大萬川柳大会

大萬ファミリーの祭典

56年 2月22日

会場・大萬

二月二十二日(日)午後一時から第二十八回大萬川柳大会が阿倍野区松崎町の割烹大萬で開催された。

司会は西田柳宏子氏。開会の辞に立たれた若本多久志氏は「春は大萬川柳から」とのキヤッチフレーズをつくられた一三三さんの言葉が実感される今日、路郎先生から白柳、好郎氏と継承された息吹きが尊くうれしい、と盛會を祝福、亡き松江梅里氏の信仰と事業を語られた。

恵まれぬ過去が苦難に耐えてくれ 梅里
という句を死ぬ前に詠まれたのは、梅里さんがご自身の死期を知っておられたもののように思えると、梅里氏の個性味のある句を多く紹介しながら故人を偲ばれた。

次いで主催の川村好郎氏が、百名近い出席を頂き、毎年大萬川柳會が充実して行くのは川柳塔の力に負うことは言うまでもないが、

陰の世話をしてくれている藤井一二三氏の努力を謝したい、来年は大萬川柳三十年になり弟梅里の死後十五年でもあり、また自分も八十歳という意義のある年でもあるので、「梅里追悼と好郎自祝」の會を持ちたい、と結ばれた。そして、その場で一二三さんの表彰と記念品の贈呈があったが、一二三さんは、だしぬけのことでびっくりしながらの受賞であった。

ついでベストテンの表彰式に移り、立派なトロフィーが晴れの十名に渡され、ベストセブンの選者による作品の披露に移る。

席題 やけくそ

兼題 茶碗

抱く

メンバー

秘 密

絆

特別課題 念願

今年も横綱の花梢さんはトロフィーが七本になったそう。

閉会の辞は例によってミスター閉会の辞の菊沢小松園氏、午後四時三十分終了散会した。

★

ベストテンで表彰を受けた人たちを囲んでの懇親宴は大萬特製の松花堂で例年賑やかにはずむ。大萬のご主人松江克美氏の挨拶、西尾某氏の音頭で乾杯。瓢太氏の手品、鎮彦氏の「古城」に続いて、受賞者の喉くらべとなる。

花梢さん「南国土佐をあとにして、道子さん「秋田おぼこ、この人の民謡は旭区の大會で入賞という本格派である。アンコールに一転して歌謡曲「他人船」、寿子さん「ブルーライトヨコハマ」続いて武雄氏・和子さんと歌山勢のデュエット、雄々氏は遠来の人らしい

味の「関の五本松」、好一氏はリバイバルの「旅の夜風」、右近氏「大漁節」、夕花さんは「十三夜」、二三氏「二人の夜明け」。



喜びのベストテン・前列左から和子、夕花、花梢、寿子。中列左から雄々、武雄、右近、道子。後列左から好一、二三の諸氏。

受賞者一巡のあとは、水原弘ならぬ水野弘氏は予想外の「きんきらきん」、太茂津氏の「小諸馬子唄」、修史氏「緑の地平線」と歌爛漫で果てるを知らぬありさま、克美氏夫人の「北国の春」まで出る。六時三十分、大坂形水氏の万歳三唱で一応のお開きになった。来年も是非出席して好郎・梅里二兄弟へのご恩返しをしたい。
(薫風記)

★

特別課題「念願」 西尾 栞選

人 念願を男がもつと鬼になる 弥生

地 念願に別れ話が一つある 岳人

天 念願へ母のパートの日がつづく 千万子

兼題「絆」 藤岡 花梢選

人 形身分けゆつくり絆がゆるみ出す 君子

地 涙の対面これが絆というものか 柳宏子

天 流人舞う鼓の音は絆の音 酔々

軸 背を向けた絆に受話器又にぎり

兼題「秘密」 飛田 好一選

人 その秘密足袋の白さに責められる 君子

地 前歴の秘密酒場の灯を好む 弥生

天 踏み台でとどく所にある秘密 小路

軸 公然の秘密カーテン透けている

兼題「メンバー」 小西 雄々選

人 台湾へ発つメンバーの顔の艶 小路

地 メンバーに背を向けセクト主義でいる 修史

天 梅だよりメンバーみんな遊び好き 太茂津

軸 小粒でも和のメンバーという強味

兼題「抱く」 高橋 夕花選

人 思うこといっぱい抱いてる春炬燵 美代

地 子を抱いて愛の深まる鬼子母神 酔々

天 膝を抱く男にバズルまだ解けぬ 和子

軸 面影の一つを抱いて妻となる

兼題「足元」 浦野 和子選

人 足元のつまらぬ小石によろめきぬ 弘

地 足元の花の色には気がつかず 小松園

天 踏ん張って母の足元動かない 維久子

軸 薄絹の足元春が匂い立つ

兼題「茶碗」 若宮 武雄選

人 夫婦茶碗せて椀へ入れてやり 多久志

地 茶碗に向う祈りだけは忘れまい 弥生

天 夫婦茶碗に触れてはならぬ疵をもち 弘生

軸 夫婦茶碗割れる定めを脱け出せず

兼題「やけくそ」 野呂 右近選

人 やけくそにさせたあなたが憎い夜 修史

地 やけくそになれる母の性を持ち 夕花

天 やけくその酒は涙を知っていた 多久志

軸 母と言う自覚やけくそにはさせず

円 満

宮尾 あいき 選

円満な家に福神坐り込み
 円満を願う男で霸氣がない
 円満な夫婦に月もまん丸い
 円満な退職企みなど持たず
 円満にことおさまって交す酒
 円満な夫婦にされている苦笑
 円満な人柄耳が遠くなり
 円満の鍵はお互い掌の内に
 恐妻家円満そうによく笑ひ
 円満にさととして帰す実家の母
 円満な夫婦で媒酌たのまれる
 能面の下円満な顔で舞い
 円満な手打のかげにある不満
 円満な家庭の微風心地よい
 円満な家に素直な子が育ち
 円満に八十年を共白髪
 笑声いつも隣の垣を越え
 円満な人柄を売る立候補
 よいお酒家庭円満宵寝する
 夫唱婦随して円満な愛の城
 円満な心でかなでる愛の詩
 円満な労資さくにものが云え
 恩恵の中で円満の種子を播く

円満に時の流れが変えてゆく
 円満すぎて女不安がり
 円満な男の顔がものたらず
 調停員円満解決させたがり
 一合で酔う円満な父である
 円満な家庭でのびのび子が育ち
 上京の親に円満らしく見せ
 円満です進軍ラッパ嫁が吹く
 お互に温め合うで母が家庭
 円満な社長の下で社が栄え
 円満に見えて娘に縁がつき
 適当に妬いて夫婦の丸い中
 円満の相を仕上げて喜寿の宴
 子の寝息円満足りたわらべ唄
 円満は長寿の秘訣ひなたほこ
 円満に済んで野次馬拍子抜け
 円満な顔で万年平社員
 円満な人柄でした計のしらせ
 見せかけの円満湯呑みが知って
 住
 円満の秘訣補聴器はずして
 円満に手打ちが出来た朝の星
 円満な夫婦でピンクの色を選る
 円満に押す印鑑を掃除する
 自画像に円満の皺深く彫る
 人
 老夫婦肩を揉み合うシルエツト
 水炊きの湯気円満のど真ん中
 円満第一ネクタイを地味にする
 天
 柳子
 雀踊子
 可住
 秀子
 重人
 千子
 軒太楼
 テルミ
 春日
 綾珠
 三五島
 大柏
 文平
 喜酔
 本陰棒
 女
 美穂
 枯梢
 茶人
 木魚
 千子
 素三郎
 ゆう也
 里風
 宵明
 重人

川柳塔 バツジ

男性用(ネジどめ)
 女性用(ピンどめ)
 一個 一、〇〇〇円
 (送料 一二〇円)

無一文円満の顔くずさない

暇

山本 立児 選

凡人の眼に暇そうな考古学
 編棒が炬燵の上で暇を待つ
 神様も暇で賽銭箱のごみ
 看取る暇千羽の鶴に願ひかけ
 恩着せの公休家計をおびやか
 鼻毛抜く暇で男は明日を画く
 暇のある女が火付け役になる
 金と暇ない私にも夢がある
 暇のない体にしては肥りすぎ
 金と暇でこれこれで年が暮れ
 暇のない割には儲けの薄い顔
 夢
 武水
 久仁
 秋女
 雀踊子
 規不風
 軒太楼
 茶人
 道子
 与根一
 みどり
 軒太楼

追悼 戸田古方先生

神谷凡九郎

先生のお宅に年賀にお訪ねするようになってから何年か過ぎたある年、今年から干支を題にして、逝く年の反省と新年の心を少しでも現せたらと思ひこんな事を始めましたと年賀状に書いた句の心づもりを話したら、「それ面白い。是非続けなはれ。」と云われて、始めた年賀の句も子から今年は酉になり、十年が経つたことになる。それ以前からだから十数年つづいてゐることになる。元日はもっぱら寝正月で一步も外に出ない僕だから、二日初めて家を出てその目的地が古方先生宅であつた。こんどこんな事があつて今更らしく氣付いた事だけれど、家族以外の人でその年一番最初にお逢ひしていたのは先生であつたのだ。何を今更と云われそうだが、びつくりしてゐる。僕はそんな男だから、今から考えると先生のお宅にも都合もあつた事だろうに、

そんな事を少しも氣付かずに通された奥の部屋に座つたまま、長時間、それをもつぱら川柳に關係のある話をお互いに喋つていた。それは、先生の誘導に乗つて喋つていたと云つた方が正しいのかも知れない。そんな年中行事だが、それが去年と今年は行かなかつた。と云うのは、去年は私の不注意でバスをひと駄乗り越したためである。そして、今年だが、去年末からかかつた風邪が治らないので万一先生にうつしてはと思つて遠慮した。勿論、その事を電話連絡したが、何故か電話もかからなかつた。やつと四日、風邪もすつきりしたので二日の電話の件を氣にしたが、とにかくと思ひ豊中のお宅に伺つたら先生はおられてやつとお会い出来た。療養中のことであるので今年は例年になく早々に引きあげさせてもらつたが、その短時間のうちに、何と

なく氣になる事がやはりあつた。それは話し合つてゐる間にそんな話はしてなかつたのにその時侯がそう聞えたと思つたのか、先生が実際にそう云われたのか、今もつてはつきりしないのだけれど、「十五日までは此処におりますすけれど……。」と云う言葉であつた。聞きなおそうと思つたが何故か言葉は出せなかつた。それからもう一べんお伺いするつもりが、退社時間の違い僕は平日は駄目だし、日曜も何やら雑用に明け暮れるうち、とうとう月末まで電話一つかけぬまま過ごしたが、土曜日で早く帰つて来た一月三十一日お宅に電話をして、入院されている事を知つた。そして二月二日朝、会社へ家から知らせて来た計報につづくのです。

元來僕は無神論者であり、仏教の方も不信心で、お墓参りもお盆にやつとするだけと云う男なので、以上長々と書いて来たような事象は、すべて偶然以外の何物でもないと思ひつつも、世の中にはやはり何かあるのかも知れないなと云う氣持を否定しきれないものを感じます。

よく人に云われるのだけれど、「凡九郎の句は、古方の句に似ているな。」と云う言葉である。師であり、弟子ならそれは当然かも知れないが、僕は全然そんな意識は持つていな

法名

柳風院釋孤篷

昭和56年二月一日 逝去



い。ただ云えることは、僕の独り合点かも知れないが、前述のように何年も何べんも話し合っている関係上少しは当っているとも思われる。それは、此の地球上に生きている生物の中で人間程汚いものがあるだろうかと言う思いであり、然も、その人間も本当に可愛いのは自分以外の何ものでもないと言うことだと感じ、なんとかそこから昇華したいの思いが、川柳へ自分を走らしたのではないだろうかと言う事である。先生がそうだと僕は断言し得ないが、先生の教えをうけた僕はそ

こから一步も抜け出せない男になっている。だから、路郎師の「川柳は人間陶冶の詩である」の言葉、紋次先生の「川柳は人間である」の言葉、水府先生も塊人先生も同じような事を云っておられるのだが、それを考える時、川柳をやることは素直に人間を見つめ、何が本当なのかを探す事でないだろうかと思う。

何時だったか僕が先生に、「川柳は一つの宗教であり、句は経文かも知れませんか」と云った時、先生はそれを肯定して下さった事を覚えているし、多分僕を縛る言葉になると思う。古方先生は僕にとって川柳の師であると同時に、人間をどう見るかを教えて下さった大切な人である事をしみじみ感じています。余り自分のことは書きすぎたと思うが

そんな先生であつたので、他の人達にもあの温顔で接し、陰を持たない人であつた。豊中で開かれた川柳講座から出発した木曜会は、なごやかに続けられている。木曜会は今後とも会員全員が力を集中して、同人の安藤寿美子さんを中心として今後とも先生に教えてもらったものを忘れず大切にして行こうと申し合せた事であるし、同じ木曜会の会員である高橋古啓さんが、堀口塊人先生と知り合いの関係で出席しておられた川柳文学の句会には古方先生も余程止むを得ない事情のある時以

外は万障繰合せて出席されたが、古啓さんは遠くから見て下さる先生の心として写ったとか。

最近テレビでよく聞く歌であるが、「愛は死にますか、山は死にますか」ではないけれど、私達にとっては「愛は決して死なない」と即答してはばからない人として、古方先生は多分生きつづけられると思っている。また聞きなのだが、「他人を変えようとしてはいけない。そう思ったらその前に先ず自分を変えて行かなければなりません。そうして、その人と話し合える場を作らなければなりません」と仰言った言葉も先生らしいなと思った。とにかく僕は僕なりの頭で抱んだ先生の像を離さないようにして、眼を明日に向けて歩いて行かなければと思っている。

やつこらしよ 悟りの道など散歩しよ

これは古方先生への私の弔吟です。どこかでアンタ何年川柳やってはるの、何時になったら判るんですか、弔吟と云うものはネ、と云う声が聞えそうな気がしないでもありませんが、僕には弔吟としては、この句しか出来なかつたのです。古方先生には判つてもうえると信じます。 倉章

短い人間の一生のうちにくぐり会う人は、およそどれほどでしょうか。そのすべてのえにしの中で、古方先生にお会いした私たちは本当に幸せだったと思います。どんな人も自分以外の人は皆師であると申しませんが、古方先生が私たちの心に川柳の灯をともして下さった事をおもえば、先生こそ数少ない偉大な師であつたと申せます。私が五十年度川柳塔賞を

いただいた時、本人の私以上に喜んで下さったのは古方先生でした。あの時の電話のお声は今も耳に残っております。一人でも多くの人に川柳をつくる事をおしえようとされた先生の努力が、一つの形となつてあらわれた受賞だったのでした。

ひ孫弟子とまではいかない古稀にして

古方

私が初めて古方先生にお会いしたのは私たちの小さい俳句会に来られた時でした。その前に大阪府警機関誌「なにわ」の柳壇で当時選者であられた麻生霞乃先生が句評の中に例句として「神経をぬけば地獄のお

南無 釋孤篷先生

もしろさ 古方」というのを取り上げて居られました。お名前を覚えていた私が「古方さんて川柳なざる方ですか」とお話しかけたのが始まりでした。その俳句会ではあんまり選に入らなくても厭な顔もなさらず昨年六月まで休まず出席して、選評のあといろんな話題を提供して皆とのしい討論をして下さいました。

安藤寿美子

昭和四十七年公民分館で古方先生の川柳講座が開かれ、受講した私たちは豊中川柳木曜会として川柳への第一歩をふみ出しました。古方先生亡き今、たよりない足どりながら何とか先生の足跡をたどろうと先生の育てて下さった木曜会は相互学習という形で勉強してまいります。

そして私も川柳塔本社句会を得がたい勉強の場としてがんばります。教えていただきたい事、聞いていただきたい事は一ぱいありました。そして先生のお叱りをもっともつといたできたかったです。どうか先生、時々化けて出て来られて私どもをお叱り下さいませ。合掌。

弔 吟

ほほえみの雲より遠き人となり
如月の旅あいたかしお人柄
今日よりは白い真になる画帖
絶筆となりし句帖を握りしめ
弟子たちをほつたらかして旅に立ち
桜待たず逝く師に匂う梅の白
春未だ師の君逝くと悲報受く
やつこらしよ悟りの道など散歩しよ
いただきしこの燈火を絶やすまじ
思ひ出は詩情豊かな師の姿
句会にはいつち先にと来た歩調
句帖手に絵筆を振う雲の峰
ペン先に絵筆にかもす暖かみ
安らかに写生三昧わが恩師

小松園 鬼遊 古啓 綾子 富子 ミナ きみ子 凡九郎 寿美子 喜風 与呂志 柳宏子 治子 きく子

●葬儀参列者（敬称略）

中島小石（生々庵代理）・西尾葉・若本多
久志・菊沢小松園・正本水客・黒川紫香・大
坂形水・若柳潮花・西田柳宏子・児島与呂志
・高杉鬼遊・香川酔々・金井文秋・塩満敏・
齊藤二十四・神谷凡九郎・桑原喜風・小川恒
明・安藤寿美子・鶴飼蟬朗・永田帆船・高橋
古啓・金泉萬葉・豊中川柳木曜会・三井丘川
柳会・東大阪川柳同好会・千里公民館・螢池
公民館

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

■中村富二・千句集が、5月発刊予定(編集・川柳とaの会、発行所ナカトミ書房)申込先 〒153 東京都目黒区大橋一六一三・七〇一振替口座・東京2の115774番、名義人小野範子。特装本七千円、普及本二千円(送料五百円)

■昭和56年岐阜川柳社川柳大会が3月29日(日)10時から岐阜商工会議所で開催。題と選者 芽生え 鱗魚 艶 登美子、効果 騎久夫、ワシマン 路也、自由席 史呂、伸びる 紫苑莊、豊か いさむ、事前投句・これから 初枝

■昭和56年度津山市芸術祭津山川柳大会開催。6月7日(日)津山市大手町美術教育会館。題と選者 故郷 吟一、言葉 哲秋、植える 俊生、歯 恵美子、私 新子、傷 鬼遊、その夜

■千尋、澄む 好啓、長男 豊次、雑詠 冬二

■昭和55年度いずも賞は次作品に決定した。茶に招かれ 噂を一つさけて行く 角 耕草。準優秀句として、山茶花の白春雪に盗まれる 園山多賀子(この項いずも川柳会・主宰尼緑之助氏)

■虹川柳倶楽部(唐津市・新岡回天子主宰)では、川柳句集「まつら第三号」を発刊。回天子氏は同人16氏の作品がとりあげられている。序文にかえて、中島生々庵主宰の書信が載せられている。

■回天子作品より。

きき耳を立てて兎は飾られる／よみがえる中気のな土で左書き／菊天位高価なは汽車で来た

判型B6判一七〇ページ。発行所・唐津市東町2-55 新岡正治。

■第26回むらぐも観桜川柳大会が、4月5日木次町で開催されるが、大阪より正本水客、黒川紫香、若柳潮花の三氏が選者として出席の予定。

■本多恵二朗句碑建立記念並に真庭親睦川柳大会が、

3月15日真庭郡勝山町警察署大会議室に於て盛大に挙行された。

■坂出市の案山子川柳社では、副会長木村山紫氏の逝去にともない、次のような人事が行われた。

会長 藤原葉香郎、副会長 兼主幹 三木時雨郎、副会長 吹田朝見氏。

■ふあうすと川柳社では、柳誌六〇〇号記念、第11回紋太忌、55年度賞発表を兼ねての川柳大会を5月24日神戸市中央区兵庫泉福社センターで開催予定。兼題 裁く、棧橋、責める、握る、釘、道、読む、表情、流れる、弾む。会費 千円。

■帆傘川柳社(高知県) 55年度賞として、次の三句に授与された。

旅立ちへくらしの顔はおいて行く／西村信子。停電の日からとなりと口をきき／片岡菊。片減りの靴定年の音がする／高橋涼風。

■池口春歩氏(東京都)より本誌寄贈に対する謝辞並びに読後感の柳信あり。

■橋元言也氏(ふあうすと川柳社同人)は、2月22日

福岡市の寄寓先で老衰のため逝去。行年八十三歳の大往生であった。生前の氏はふあうすと社の元老的な存在であつたが、番傘、川柳雑誌、川柳文学、せんば、天守閣といった在阪各社の句会には精力的に出席されていた。謹悼。

■川口弘生氏(大阪市)医師仲間7人と城崎へ小旅行。左の句を寄せられた。

城崎の出で湯二月の雪ゆるむ

■日川協通信

◆昭和五十六年度総会

▽句会案内△

■菜の花句会

時・4月10日(金)夕6時 場所・八尾神社境内西郷会館。近鉄大阪線八尾下車西

南歩約三分幸福相互銀行裏兼題・女史 西尾紫、大阪風景 香川醉々、野菜 未定、学校 未定、持つ 未定。席題は一通(各題3句) 連絡先 〒581 八尾市中田二丁目302 高杉鬼遊 (投句料は郵券二百円)

■堺川柳会

時・4月15日(水)夕6時 場所・堺市民会館4F和室 南海高野線堺東下車歩10分 兼題・新人、自然、暮、腕 連絡先 堺市堀土緑町二丁九二河内天笑

■南海川柳会

時・4月16日(木) 場所・南海会館ビル本社地下食堂 兼題・補助金、冒険、知恵 連絡先 南海電鉄辻主水

■大阪川柳会

時・4月20日(月)夕6時 場所・阿倍野区松崎町大萬 兼題・四面楚歌、締める、新芽、CM(コマーシャル) 新人。 連絡先 〒544 大阪市生野区生野西1の5の2金井文秋。

■東大阪川柳同好会

時・4月25日(土)夕6時 場所・東大阪市中央公民館2F。近鉄大阪線水和田下車 兼題・寺、骨董、腰、遺跡 連絡先 〒577 東大阪市新池島町1の4の14斎藤三十四。

(集録・香川醉々)

(理想論の舌にまんとまるとるめられ)

理想には二三歩足らぬが妥協する

微苦笑の原因理想説く若手

(理想説く若手の論へ苦笑する)

青い鳥死ぬまで追うて悔はない

理想の灯高く掲げて貧なれど

(理想の灯堂々掲げている清貧)

軍隊を無用にするが理想です

泥棒のいない世界は楽しから

(理想世界に泥棒がいるだろか)

現実と理想札束うろたえる

(現実と理想の谷間で札が哭く)

理想論ばかりでコーヒー苦くなる

三男

同

同

昭治

同

やすお

同

幸

同

同

理想の家建ってローンの台所
枝ぶりの理想へ花芽切り落す
高過ぎる理想へあえぐ人生譜
娘の描く理想の人は父に似る
理想論が陰で社長を袖を引き
教科書も校歌も理想を歌い上げ
理想には遠いが僕には過ぎた妻
理想には遠い夫婦で真珠婚
躓きながらも理想の彩が褪せ
少年の立志へ燃える理想像
(少年の胸で理想が燃えたいさる)

結局は理想の地図が擦り切れる
一人称の部屋で理想が崩れそめ

芳枝

同

同

美佐

同

帆雀

同

利美

同

胡顔子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

火遊びの女と深くなる二月
サイコロで遊んで七を出したが

「魅力」

森中恵美子選

嫁に行く少し魅力のあるうちに

曖昧な笑い魅力になつてくる

天春の街少女は魅力たしめる

軸 沈丁花母の魅力はまるくなる

「マッチ」

中尾 藻介選

人 放火出来そうなマッチが置いてある

人物証になるマッチなど持っていない

天 徴兵のうわさとび出すマッチ箱

軸 マッチをばすように女は身の上を

「天」

菊沢小松園選

人 一匹の虫にも生きる天がある

地 女より先に天国へは行かぬ

天 人妻を天を怒らせてはならぬ

軸 満天の星誰はばからず抱きしめる

恵美子

醉々

信治

弘平

天笑

恵美子

藻介選

恵美子

健司

育園

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

適齢期の胸に描いた理想像

母と娘で理想の像がくい違い

旅立ったあとで理想の夫となる

理想追う友の本心見失なう

職人の理想は遠くに置いている

理想には遠い道のりコソコソと

根性の無いくせ理想が先走り

理想追い互に回わす夫婦独楽

虚勢張るだけ追いつめ理想像

(虚勢張るだけ追いつめ理想像)

理想とはこども違った定年期

見合馴れだんだん調む理想像

労と資の理想の歪ストを生む

裁判沙汰一件も無し理想郷

理想論独身貴族という若さ

現実に向けた男の理想論

理想論いつしかボトル底をつく

理想のみ高く足許宙に浮き

青い鳥追つてくるような理想論

齢不惑理想の像がまだ画けず

子育てに理想ばかりが走り過ぎ

華やかな理想を秘めて若くいる

それぞれ理想でもめる設計図

一億の中に理想の妻がいる

理想へは遠しいつまで共稼ぎ

裏がえしにされて理想が消えた亀

★

題「糸口」4月20日締切(6月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

千七一一

本田恵二郎

本田恵二郎

本田恵二郎

本田恵二郎

川柳堺百五十号記念句会

(二月十一日堺市民会館)

席題「雪」

墨作「郎選

人 木の瘤を雪はしずかに通り過ぎ

地 雪をあるく女に責めもあるだろう

天 雪おんな憎い枕へ泣きにける

軸 俺が死んだら港の坂の雪が哭く

「酒」

阿萬 萬的選

人 ほんのりと目もと可愛い祝い酒かな女

地 漬物で地酒のうまい里の夜

天 善人の酒で本音がすぐこぼれ

軸 地酒のうまさしみじみ雪のひとり旅

「遊び」

香川 醉々選

人 遊びたい主人を犬が呼んでいる

地 鍵っ子の遊びは雨に濡れてくる

花梢

火遊びの女と深くなる二月
サイコロで遊んで七を出したが

「魅力」

森中恵美子選

嫁に行く少し魅力のあるうちに

曖昧な笑い魅力になつてくる

天春の街少女は魅力たしめる

軸 沈丁花母の魅力はまるくなる

「マッチ」

中尾 藻介選

人 放火出来そうなマッチが置いてある

人物証になるマッチなど持っていない

天 徴兵のうわさとび出すマッチ箱

軸 マッチをばすように女は身の上を

「天」

菊沢小松園選

人 一匹の虫にも生きる天がある

地 女より先に天国へは行かぬ

天 人妻を天を怒らせてはならぬ

軸 満天の星誰はばからず抱きしめる

恵美子

醉々

信治

弘平

天笑

恵美子

藻介選

恵美子

健司

育園

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

藻介

同子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大 萬 川 柳

「想 像」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
 投句総数 四百三十二句
 入 選 四 十 七 句

鳥 取 秋 女

想像がヒタリ嬉しい初対面

大 阪 柳 伸

想像の女神五月のシルエット

堺 千 万 子

絶望という想像を叱られる

八 尾 夕 花

想像で自虐している日の焦り

大 阪 君 子

想像で描いた愛の図裏返る

眞 面 一 本 杉

裏付けのない想像の記事でもめ

今 治 純 平

想像で描くアニメに子は夢中

大 阪 好 一

想像が女の妬心かきたてる

桜 井 雀 踊 子

モノリザの微笑に瞼の母思ふ

米 子 み ど 里

想像へくるくる変る旅プラン

今 治 宵 明

想像を壊して夫信じよう

大 阪 智 子

想像がふくらんでゆく時刻表

大 阪 公 一

家中の夢がはみだす設計図

大 阪 ふ み

幸福を想像してたに借りにくる

和 歌 山 英 子

袖通す娘を想像して運ぶ針

愛 知 甲 子 郎

大胆な恋想像の外に出る

大 阪 蘭

お隣りが想像する程持つていず

今 治 胡 頴 子

想像を駆使する愛の設計図

奈 良 カズエ

想像をつなぎあわせて虹を画き

倉 敷 通 風

想像を肯定されての企画

和 歌 山 寿 子

想像のきれいな愛よ登気楼

米 子 千 代

空想の塔へわたしも積む積木

豊 橋 貴 弘

想像の筆で多彩な夢を描く

神 戸 とんたく

クレヨンへ子の想像の果しなく

高 知 三 吉

肩に掛け手にかけ想像する晴着

島 根 文 子

想像のつかぬ広さへ子等は翔び

八 尾 美 幸

口笛を吹くと想像甦える

米 子 雄 々

想像でまぎらし愛に飢えている

米 子 な み

地球儀に想像ふくらむ子の瞳

富 田 林 花 梢

想像が現実となる四面楚歌

想像がいつか鼓動となってくる

堺 一 二 三

想像を笑顔に変えた聴診器

想像を行く雲に乗せ草に寝る

大 阪 弘 生

女なに想像してたか抓ねられる

一片の出土瓦が古都語る

兵 庫 ゆう也

一身上の都合は想像に任しとく

想像を消して重ねて聞くビーポー

今 治 佳 雲

想像が拡がってゆく空の青

想像を越えて美事な土星の輪

佳 句

堺 一 二 三

想像して涙 わたしも親が無い

米 子 美 世

前身を想像される身のこなし

今 治 胡 頴 子

想像の翼ひろげて飛ぶ噂

名 古 屋 枯 梢

妄想の海へ落ちこむ物思い

岡 山 千 代 香

想像にまかすと女たじろかす

人ノ句

和歌山 正博

想像の顔と対話の電話口

地ノ句

弘前 叶

いろいろな想像させて住む二人

天ノ句

和歌山 寿子

想像へあなたと渡る橋がある

選者吟

想像ですがと急所突いてくる

昭和五十六年度

ベストテン(二月現在)

一〇	佳雲	三・五	今治
一一	千代香	三・〇	岡山
一二	叶	三・〇	弘前
一三	美世	三・〇	朱子
一四	正博	三・〇	和歌山
一五	好一	三・〇	大坂
一六	文秋	三・〇	大坂
一七	素身郎	三・〇	倉敷
一八	道子	三・〇	大坂
一九	テルミ	三・〇	交野
二〇			以下略

昭和五十六年第五回

「節約」 三句以内

締切 四月二十日

第六回

「駆け足」 三句以内

締切 五月二十日

〈投句先〉

〒593 堺市堀上緑町一三三七

藤井二三方

大萬川柳会

川柳塔社常任理事会 (3月5日)

出席者 生々庵、某、多久志、形水、吸江、

瓢太、水客、薫風、紫香、潮花、萬的、史好、

柳宏子、与呂志、酔々。

《議事並に報告事項》

☆多久志氏より2月本社会計報告あり。

☆本社事務所新設の件(診療所改築のため)

企画部が担当し、新事務所の設定に当る。

☆広告部長は企画部長兼任とする。なお多久

志氏より広告収入に関する資料を提供するよ

うに申し入れがあった。

☆今後、個人表彰に関する件は、すべて企画部の担当事項とする。

☆伝達連絡網については、詳細な系統的組織図を作成する。(小松園氏担当)

☆同人名簿作成は、4月30日締切にて、新原

稿を作成する。今回の名簿は、横組とする。

☆業務組織図作成については、薫風氏担当と

する。新同人名簿に記載するため、各部長、

及び名簿作成担当者紫香氏と緊密な連絡をと

ること。

☆本社句会天位賞は、句箋または句帳を贈呈

する。

(記録・酔々)

■4月の常任理事会は2日(木)



ATLAS

プロス

高級洋菓子・レストラン

堺市役所前

TEL (21) 2334

本社 三月句会

会場 金属会館

六日 午後六時

六日は啓蟄、奇しくも西尾某氏の誕生日とか。風はまだ少し冷たいが空も日あしも春の気配である。初出席は川柳大阪の林ひろ子さん(大阪市港区)。

今月から柳話が「おはなし」になり、気が楽になった」という某氏も趣をかね愉しい話だった。

花森安治は講演に入る前に一分間何も云わず黙っていたという。話しが始まると、それに聞きはれてしまつて十分観察して頂けない。花森という男を観察してもどうのために一分間黙っていたというのだが、一分間というのは実際にやってみると実に長い。これがマクラで、五年前にタバコをやめた話、将棋の升田九段のこと、最後は忠臣蔵五段目の話になった。

この五段目、山崎街道の場は、昔、弁当幕といわれ、定九郎が真ぬけた恰好で出るのの舞台としては榮えなかった。五段目が始まると観客は弁当を広げ出すのである。名優、中村仲蔵は何とか工夫はないものかと、妙見さん(祈願、結願の日)に大雨の中、ソバを食べていて、そこで見かけた実になせな男の姿にヒントを得、これを舞台にとり入れて、定九郎のイメージをガラリと変えたという。

何事も研究が大事、川柳も同様と、やはり最後は川柳に結びついたところでおしまい。

今月は不気味なくらい静かに聞き入り、この張りつめた空気は兼席題披露まで続き、マナーも申し分なしの句会だった。

月間賞は梅原憲祐氏が獲得。

(史好)
(受付)与呂志・敏・重人
(進行)柳宏子、記録・鬼遊

出席者・翠光・岳人・敏・与呂志・雅風・栗・勝美・重人・紫香・きみ・滋雀・太茂津・酔々・水客・千代三・右近・喜一郎・潮花・史好・蘭・瓢太・あいき・千万子・川狂子・吸江・白兎・天笑・月子・綾珠・眉水・植三・萬的・文秋・山久・文二郎・規不風・桐下・悦郎・英子・武太・三十四・千梢・寿美子・雀踊子・射月芳・度・柳柚・頂留子・鎮彦・鬼遊・凡九郎・君子・形水・憲祐・喜風・

健司・善紫・ひろ子・喜醉・信治・柳宏子・柳伸・涼一・静歩・洋敏・生々庵・美乙女・一二三・寿子・亜成。

席題「糊」 宮園射月芳選

すばしい雀は糊をなめて逃げ宿題が上手に出来たフエキ糊
違反ビラうしろめたさの糊で貼る飯粒で糊付け母からの手紙
しんし張り亡母の姿の指に糊糊少し効かしたシャツで伸直り糊つけて今日の日和へ白う干す宿ゆかたの糊をほぐしている二人糊代の糊反発を乾き
接着剤あるのに頑固ソクイ練るすこし糊つけすぎましたプラモデル糊だけで足るのに子等のセメグインプラモデル糸ひく糊をもて余し良妻賢母糊と鉄で家庭欄糊きいたシャツ男が満たされる郵便局サービス顔の糊の壺友禪の糊引く京の土間の冷え祈禱師の浴衣に糊はつけてなし裏打の糊へ苦心の刷毛さばき妻の嫉妬はシャツに糊がききすぎる親展にうっかり糊をつけ忘れ

寿美子 糸葉 滋雀 三十四 涼一 月子 頂留子 規不風 紫香 柳宏子 酔々 文秋 度 天笑 天笑 吸江 萬的 岳人 柳宏子 君子 武太

職人がボンドを当てに仕事する
糊つけて天狗の鼻を高くする

なめられて糊は威力を発揮する
糊きいた浴衣が並ぶ宿の膳

念入りに糊をつけてるラブレター
掃省して糊の匂いの中で寝る

そくく練る腕に明治をのぞかせる
日銭追う糊の手先きは狂い

強糊の浴衣の素肌山の宿
表具屋の糊に仕掛けがありそ

うだ紙雛を作る倅せそつな糊
空白のページ糊付けしておこ

う糊きいた浴衣で旅の人になる

健司
岳人

席題「香り」

河内月子選

遠方に友あり磯の香が届き

証拠みな消しても香り残ってる

いい人が出来たか香りまでチェンジ

ふるりの香りつつんだよき餅

罪深い部屋でシャネルが香り出す

鬼の面かぶると鬼の香りする

ブルジョアの香りに酔った応接間

掃省バスまず土の香に迎えられ

蕨たけた女はテレビでも香り

残り香のこれは男性化粧品

三月の香りが南窓にある

翠光

植三

頂留子

吸江

涼一

岳人

柳伸

二二三

植三

寿美子

雀踊子

一分間の柳論

藤井 一二三

柳論などと肩を張ったものではないが「川

柳は人間陶冶の詩である」以上、川柳によつ

て自己の人格向上に努めなければならぬと

考える。人に個性があるように、川柳にも個

性がなければならぬ。私は私なりに常に、

詩情のある、しつとりとした人の心を打つ句

心の温まる句を作り、それによって生きてい

る証しにしたいと考えている。

いつか或る相撲解説者が「相撲の勝負は瞬

内に対応しなければならぬ。それには日常の
稽古につく稽古によって、体に相撲を覚えこ
ます以外にない」と語っていたが、川柳も同
様に、作者の日常の行いや心掛けが大切で、
それが知らぬ間にその作者の個性ある句に繋
がるものと考ええる。宮沢賢治の詩のように、
幸せな人には共に喜び、不幸せな人には、共
に涙を流すことが必要かと思う。そして例え
一句でも滋味ある、格調の高い句をと念じて
いるこの頃である。

クレゾールの香り悲しい千羽鶴

梅の香に寒夜の庭が生きている

巧言と知りつつ乗ってみるいい香り

それほど顔ではないがいい香り

花屋から春の香りが流れ出す

新しい畳の香りと妻の顔

あの人が通るといつもいいにおり

許されぬおんたとレモンの香に融ける

湯上りの肌へ柚子の香まだ残り

少年の香りは山に似てみどり

キッチンに妻の香りがある平和

女三人なんの香りもない話

外人墓地カタカナの名の花香る

晴れの日に嬉しく香るナフタリン

好物を香りだけかく病み上り

春の香を知るドジョウの子のでかい夢

色の香もまだすこしある三面鏡

安物の香りブンブン夜の蝶

お見舞いの花の香りがきつすぎて

いづくの茶の香に宇治は生きている

物干しにわが家の土の香があふれ

牛乳屋朝の香りを持って来る

好きな女に嫌いな香りが少しある

猿真似で同じ香りをつけて来る

石燈へ歴史が香る古い文字

指切りの指から香り従いて来る

信治

憲祐

生々庵

眉水

醉々

健司

あいき

桐下

柳安子

岳人

文秋

水客

萬的

射月芳

喜一郎

柳伸

重人

蘭

千梢

三十四

天笑

醉々

規不風

生々庵

喜醉

規不風

故郷の荷を解けば母の香ついで出る
さわやかな香り漂う朝の妻
月子

兼題「任せる」 玉置重人選

任せる気無い仲人に押切られ
弘生

任せとけと言わせた酒を悔む朝
どなた

税務署も妻にまかせた小あきんど
武太

結局は任せる事で釘は差し
与呂志

任せたら結構やれる男の子
天笑

欲のない顔へ任せた鍵の束
静歩

安月給だから妻に任せよう
度

アドリアは九官鳥に任かしとく
酔々

鈍重な男で安心して任せ
柳宏子

進退伺とはケチな任せよう
生々庵

お任せします父の乾き切った声
白兎

バンドルを任すとルールを逸れたがり
滋雀

あとには神に任せて亀は砂へ産む
涼一

母さんに任すと息子みんな逃げ
二三

何もかも任せる少し眠たくて
慎三

なりゆきは靴に任せるシンデレラ
信治

任す気になった貴方の厚い胸
糸葉

此の辺で任そつか養子来て五年
右近

雨の日は傘屋に任せることにする
千梢

あなた任せの手綱はやっぱ妻がもつ
岳人

任されて明日切り開く地図を描く
君子

任された色で真っ赤に塗っておく

任された椅子の行方に海がある

任された重さの中にある素顔

任せるときつちり貧乏性を出し

仇討ちは君に任せる雪景色

任された敗戦処理が光つてる

運は棚のダルマにまかせた春日和

すき焼の糸こんにやくは任せます

まだ任かす気にならないから背を伸す

そのあとはポケットベルに任しとき

鉢巻でリーダーまかせの旗をふる

お任せをしますと白旗仕舞うとく

任されて言い訳一つ用意する

白紙一任されてそれからの風の音

兼題「負」 村田瓢太選

誘惑に負けたベンチの醒め心地

ライバルに庇われ負けたなと男う

負けたのをみんな他人のせいにする

にこにこ罰盃うけて負けつつけ

負けて勝つそんな極意がのみこめず

ふりむいた女は負けを意識する

舌戦に負けるとダルマはとっかれ

千万の溜息千代の富士負ける

負け戦と判つてからの日が永い

武太

寿子

寿子

月子

岳人

柳宏子

萬的

岳人

与呂志

栗

生々庵

水客

寿美子

重人

滋雀

美乙女

柳宏子

吸江

洋敏

栗

敏

眉水

柳宏子

綾珠

追いつめて手負いの獅子にしてしま

石蹴って負けたを自覚する男

全力を出すや涼しい負けになる

負けたのをもう忘れたか再軍備

捨てせりふ残して消えた負け惜しみ

負けて勝つ技を知ってる妻である

負けて上手の一人矢張り生残る

負けて勝つそんなゆとりのない若さ

負けて勝つコツ覚えてからの人使い

負けつつふりも芸になつてる高見山

ああ云うてこう云うたらと負けてから

負けて勝つ女の意地を知るネオン

割勘ときめて負目なく飲むうまさ

まさかと値切った道具屋がほんと負け

負けて寝るくやしき布団が動かない

負けてやることも知ってるふところ手

もう一人の自分に負けている勝負

負けて来たらしい無口の箸運び

見る人は見る見事な負けつつぶり

云い負けた方が笑っているゆとり

負け犬がもう飛び越せぬ水溜り

負けて勝つ人生の機微知るも齡

兼題「内緒」 西田柳宏子選

新聞紙で包んで来ている内緒

口に錠下してかき返もつて去に

潮花

萬的

千代三

鬼遊

滋雀

文秋

柳宏子

静馬

射月芳

洋敏

翠光

柳伸

静馬

生々庵

与呂志

鎮彦

鎮彦

千万子

形水

翠光

紫香

瓢太

栗

頂留子

いい匂いさせて内緒が耳へ来る

大臣へ内緒の耳うちある会議

オフィスの内緒話に羽がある

内定は内緒話で触れておく

気の毒なほど内緒ごとばれる父

内緒ばなし補聴器なしでもよく聞こえ

妾宅と我が家内緒がゆききする

夫には内緒で娘の恋を聞く

大仏を仰ぐと内緒にはできぬ

病人はどうか知ってた内緒ごと

内緒話をするよう雪の日の羅漢

内緒内緒男同士はかばい合う

行間に内緒話を書いてある

妻と子の内緒明るい勝手口

レーガンの内緒話へ赤い耳

兄嫁に内緒の金は借りやすし

九官鳥内緒の人の名を喋り

母と娘の話に父の席がない

子の謀議母の日近く熱が入る

内緒でもうすまされぬ式をあけ

内緒ごともなく退屈してる老夫婦

内緒ごとと壁が聞くから喋らない

母の手紙内緒の紙幣が舞い落ちる

夜が更けて皆内緒の顔となり

始めから云えはよかった内緒ごと

夫婦密内緒にしとく音がよし

翠光

柳伸

弘生

どんなく

静馬

千代三

あいき

史好

生々庵

萬的

糸葉

酔々

桐下

英子

鬼遊

右近

重人

メ女

勝美

吸江

悦郎

寿美子

生々庵

きみ

水客

少年の迷いに内緒がひとつある

善人の胃裏がいたむ内緒ごと

内緒事のない人生だった阿呆らしい

窓際に座れば内緒がよく解り

体に悪いので内緒は皆喋る

こっそりと話す言葉に実があり

内緒ごとまとめて喋る酒となり

インテリの夫婦で内緒を少しもつ

多すぎてこんがらがってきた内緒

内緒でと聞き計算が狂い出す

握り飯ないしよ話が詰めてある

内緒などないと真赤な二枚舌

兼題「離」

川村好郎代選

正本水客選

内裏離2DKに君臨す

縁あって我が家で祀る古い離

雛型をけずる木工師の無口

雛壇の一人拗めたか横を向き

おしやまな子少し気取って雛祭り

雛形のとおりに申告書は書けず

白酒へ女系家族の賑やかさ

耳の日と云われ悲しむ雛人形

雛まつり童女の顔になった母

観光用だけに残った流し雛

早よ縁ありますように雛飾る

雛の目にチューインガムの不思議なり

桐下

信治

凡九郎

柳柚

天笑

与呂志

天笑

憲枯

度

酔々

水客

柳宏子

雛壇へ質問のたびメモ運ぶ

箱出れば雛人形に座る位置

黄昏れて水子に逢える流し雛

中流の意識を雛にくすぐられ

松屋町ひなが鎧にvari初夏

vari雛化粧まわしを付けて立つ

雛壇の横にパンダの縫いぐるみ

驚の雛もつとびかかる面がまえ

雛まつり戦の事は忘れよう

雛祭りおんなの線を娘に見つけ

雛壇の前で縁談まとりそう

雛段に私の彼も並べたい

申告がまだ済んでない雛まつり

瓢太

千万子

柳伸

洋敏

柳柚

右近

多志

勝美

糸葉

一二三

寿美子

ひろ子

天笑

吸江

栗

重人

月子

萬的

形水

栗

紫香

雀踊子

千万子

憲祐

水客

花地柳壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川醉々)

わかあゆ川柳会

小砂 白汀報

約束があるとは知らず見合せせ
世話好きでやたらと花の苗を分け
世話好きが何でも彼でも口を出し
前向きの風に生きてる鯉のぼり
前向きに船は航路をたぐりよせ
国のため散って約束復古にされ
旅の恥かき捨て空き缶草に寝る
お祭りの幟がおよぐいわし雲
夢に見た社会復帰へ車イス
町内に世話好き四五人いる強み
もう逢えぬ想出つなぐいわし雲
前向きに立ち向う日 衿をつめ
気が変わりに婚約指輪が重くなり
駒つなぎ川柳会 里

歳星 敏明 醉夢 タケノ 鈴江 清泉 輝水 芳枝 清夢 美栄 白汀 小路報 醉々 月子 天笑 桐下

人生の縮図に宴会大中小

宴会の出来るかたちに膳並ぶ
指切りの悔宴に置いて来る
宴会で莫迦にはなれないのがひとり
負け犬になる宴会の不出席
心眼に仏のかたち見えてくる
忘れものしてきたような朝になる
ふとものに田舎の柿が一つある
すこやかさ生きている事をつい忘れ
束の間と知ったふところ暮れの街
好きな人出来てふところ甘くなり
ふところに明日の糧があるゆとり
素浪人だからいつでもふところ手
どじょうすくい和風ビエロという姿
宴会に酔った酔うたとうまい下戸
忘れ物届けられたを不思議がり
値下げせず形小さくなっている

東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

土の心は花に愛をおしみたい
今日冬至土のぬむりが深くなる
出土した埴輪にもある地方色
土のない街で扁平足育つ
焦土から民忍従に立ち上がり
土になる先祖はネギを子にあたえ
ふる里へ心がはやる年の暮
横顔に愛の終りをふとみつけ
映画より横の二人に散る心
鼻筋に自信の女横を向き
横這いのグラフに耐えている社連
いつの日か埋る土に鉄を入れ
土凍る中に萌える芽育てつつ

美代 鎮彦 規不風 鬼遊 雀踊子 糸葉 けんじ 柳柚 凡九郎 雅風 儀一 みずほ 潔 恭太 育園 柳伸 茂子 三十四 鎮彦 綾珠 喜風 誠一 千代子 美子 かずを 喜一郎 湖風 慶三 良京

コンテスト自セン他センが目白押し
十代が目白押しする歌手志望
当りそう宝くじ買う目白押し
人間ののろさがわかる目白押し
目白押しその中に居た女スリ
冬眠からさめる気配の土動く
川柳わかやま 堀端 三男報

晩酌にきょうのけじめをつけて酔い
花道を盛んな拍手追いかける
足跡を消す砂ならは盛って見る
女盛り過ぎた女が聞く土鈴
まき餌の海老とも知らず陥ちてゆく
盛り沢山話の核心見失う
反抗期少女はけじめに背をむける
鯛騙す事は嫌いな海老も居る
人生の余白に小さな夢を盛る
人生の盛り蝶にはまだ逢わず
鯛を釣る針の痛さに耐えている
ひけをおく先ず自分から欺ます
一ト盛の一つ欠けても絵にならぬ
盃を伏せてけじめの言葉撰る
歳月の中にけじめが風化する
海老の腰舞台に立てばヒンと伸び
天国か地獄か水族館の海老のヒゲ
盛大な拍手へ一歩退く勇氣
盛り場に人間臭い灯が揺れる
エビジャコの敷き染めがきつすぎる
虹川柳倶楽部 新岡回天子報

白屯 右近 弘生 雀踊子 悦郎 芳川 天彦 紀久子 三男 雀踊子 武太 千寿子 すみ子 弘生 紀美女 裕美 英子 凡九郎 善太 寿子 白光子 勇太 太茂津 公子 光代 義美 勝一 実

友和も百恵も並ぶ難かざり

花売りに誘われ野路に春を摘み

早生れ二浪まではと腰を据え

嘘だとは知りつつ妻のきき上手

共通で点取り虫の数ふやす

霊柩車送る黒衣にみぞれ降る

警察に手ぬかりのあり刑事室

京都塔の会

騙しあう日もあり夫婦面白し

何か炊く匂い長居をしたらしく

合鍵の匂い別居の娘に持たせ

晴々と皇居へ向う叙熱の日

久仁於

素石

四郎

一竿

掬治

虹汀

回天子

杜の報

潮花

紫香

花代子

芳子

年の暮れと云うても他人様のカネをよむ

婦人誌を買って楽しき夫かな

控え目な女に傘をさしかける

無口だが時にさばけた父でよし

さばけた人やが雑音も多過ぎる

無駄足をしたなど捌けた眼が笑う

羽けぬ翼悲しく籠にいます

正雪の恨み知ってる堀の色

海苔日和島岬も岬もむらさきに

空の旅浅草海苔を土産にさし

拝賀式一粒選りの砂利の道

宮城を見下ろすビルが建つ平和

求芽

白李

明代

飛鳥

杜的

水客

美總

遊香

笛珠

三求

誠史

白漢子

55年度各地柳壇賞

新谷笑痴氏に決る

若本多久志

▽第一位秀句

捨てられた姿で葱は根をおろし

新谷 笑痴

高度に組織化され、管理化された現代社会に生きぬいて、人生の幸福を求めることは難しい、と言う前に、よくこの句を味わってみると、逞しい勇気が湧いてくるように思う。

▽佳句十篇

青紫蘇の味さわやかな人と飲む

無人駅誰のころか四季の花

人をみな燕雀にして孤高たり

芸に生きる誇り妥協が許せない

嫁の出す冷飯温う食べてやり

下座で打つ太鼓は雪の音になり

剃りあとに鬨志が燃える朝の駅

燃え尽きる時かローソク音を立て

悔恨の音のひとつに棺の釘

本当の顔を鏡の外におく

吉原 紅月

八木 千代

菊沢小松園

藤井二三

石部 世山

若柳 潮花

丹波三千子

宮園射月芳

三宅 不朽

川竹 松風

▼各地柳壇賞記念品は四月七日の本杜句会でお渡しします。

あの頃を笑えば戦陣訓のこと
荒海を得たりと海苔のよく育つ

川柳さやま

河原みのる報

大將は座ったままの勝ちいくさ

座っても立っても母の背が丸い

正座する背に南天の実が紅い

これしきへ明治大正は肚座る

車座で還暦祝う黒田節

大役の紋付姿にほれ直し

大役を銘酒で競う丹波杜氏

大役を果し自信の芽を伸ばし

大役を受けて総代酒を買い

大役と重い足とが歩を合わす

翔ぶことを忘れた鶏のせまい檻

難民の見送る冬の渡り鳥

コケツコの一声岩戸開けた鶏

めんどりを鳴かせ平和の春が明け

日曜も正月もなし鶏の朝

いずも川柳会

板垣

草丘報

金策の冬の日さしの暮れかかる

黄昏を配って早い月の彩

年月の早さ指輪がゆるみだす

招かれたわががわからぬ顔が寄り

招待の代理の席が広過ぎる

招かれて女着てゆくものにふれ

近道に頼らず生きた過去の汗

近道にうまい酒あり縄のれん

思い出を築くむ里の掘炬燵

悲しみのほてて楽しい過去を追う

タバコでも鳴る報知器であわてさせ

気が弛むときポケットベルが鳴る

和友

弘三

可住

越山

ひか平

近郊

百合子

愛子

房子

法齊

エキオ

とみ子

ゆきお

与志

文平

八陣

孝華

醉夢

みどり

軒太楼

独仙

秀子

栄

鐘堂

九二老

代仕男

草丘

孤呂二

明
朗
報

重善 柳柚 凡九郎 射月芳 笑報 良子 素灯

古葉庵

重
人

恭太

千代三

笑痴

吐
来

眉水

亞成

千万子

鎮彦

恒明

千寿子

悦郎

翠公

美乙女

与吕志

雅風

射月芳

女

幸太郎

小路

武雄

吸江

美代

口説かれてみたいお酒を一つ受け
友送る掌の温もりの酒を酌ぐ

南海電鉄川柳部

辻

備後桜

御用始め何処のお嬢さんかと思ひ
御用始め故郷の温もりさげて出る

むつかしい顔はなかつた御用始め
御用始め遊びつくれた顔そろう

御用始めめいもかく松竹梅で明け
御用始めめいも風景また見られ

番犬が御用始めをうれしがり
郵便が山と積まれた御用始め

御用始め昨日の酔の顔まじり
白羽の矢立ってつとおいと思案する

御用始め皆美しく見える日よ
もう二三日正月はしい御用始め

あこがれの君は野に置くレンゲ草
あこがれがこんなものか知るハワイ

あこがれのシャンゼリを今歩く
あこがれの旅立ち定年をヨーロッパ

あこがれの名門校は歯が立たず
あこがれの君にも出逢える同窓会

あこがれた句会で今日も四苦八苦
矢でも来い腕でも来い屠蘇機嫌

外づらは矢でも鉄砲でも妻怖い
川柳ねやがわ

赤旗を振る先頭に立っている
涙笑腹におさめてポスト立つ

恋を恋してる真赤なくちびるよ
花追うて蜜蜂日本中廻る

木枯しにサルビア赤くつきささる
赤信号無視つと走る恋の闇

一三三

小松園

清女

主水

泉秋

正流

儀一

勝美

維久子

さゆり

綾珠

ミツエ

柳伸

雅風

さよ

宏子

部下に背を見せたくはない廻り椅子
赤字線炎える紅葉の谷を縫い

赤い靴迷路につづく灯がとる
一生を子に賭け廻る寡婦の独楽

黒幕が云わせる口かよく廻る
新雪に赤いジャンパー陽をはじき

足の爪真つ赤にそめていた尼僧
ピエロもつ回り舞台に逆らわず

雑草の中威嚇している赤い杭
赤いポストに童話が溜まる雪の朝

ワンマンにに応じて回る夫婦独楽
赤ん坊の様に脱がせる酔いつぶれ

私を軸に今年も地球は廻る
今日の幸想えば耐えし日々廻る

廻り道したと言えない汗を拭く
白・黒・黄みんなに赤い血が流れ

愛故に一方的に赤く燃え
人事異動廻らぬイスへ座る僕

川柳大阪

ホステスはこんな素敵な陽を知らず
ドカ雪にアイゼンの足はかどらず

北国はつらい大雪のお年玉
冬の風五十路の背を突く寒さ

大胆な言葉は心を突いてくる
戦争は映画だけなら面白い

家計簿を嫁に任せた背が丸い
豆まきへスター出揃う年男

福豆を撒く父ちゃん少し酔い
福豆の一つが福を呼んでくる

妻の勤へソクリばれて差し押え

弘生

右近

青波

メ女

恒明

三千子

度

柳宏子

琴音

英比古

小路

翠光

博泉

英王子

光途

亜鈍

差押え遠い言葉となる平和
誕生日ゆつくり来いと白髪染め

誕生日可愛い招待客が来る
身替りに大きな代償のしかり

身替りのふつと主役になった顔
身替りの仏をピエロに仕立てあげ

身替りの地蔵の首は又継がれ
オーエスケ川柳会

大坂

形水報

光男

度

登

一念

てまり

亜成

佳句地10選 (前月号から)

谷垣史好選

人生を終えるみごとな夕焼けだ
春風を信じ銀杏も地に還り

海鳴りが聞える名人芸の三味
議事堂を出ると尻尾が見えてくる

肩車の子はどんな視野を持つ
糸の切れた風の自由が海に落ち

峠越す手綱は妻が握りしめ
ろうそくの炎仏へよく話し

いちじくの青きに少年つと走る
陸橋を冬のジャンケン下校する

作一郎

比呂志

道子

天平

秀峰

雅巢

喜醉

弘生

光男

度

登

一念

てまり

亜成

度

鎮彦

メ女

ポンコツが突然走り出す不気味

たぎる鍋蟹観念の泡をふく

焦げ臭い鍋が呼んでる長話

正月の笑顔残している初出

につりとどん尻走る子に拍手

鍋釜が乾いて妻は旅の宿

停滞中メーターだけが走りだす

ジョギングの吐く息白く通りすぎ

秒単位で男盛りが走ってる

寒風に思わぬ活気づく衣料

鍋洗う朝片意地な独り者

父と子のレールちがつたまま走り

建つ家のように金ぐり追いつかず

峠道雪に首出す立地蔵

一年間貯めた達磨のお年玉

曲芸のパンダ本心泣いている

言い勝った言葉に心の重い夜

まっ白いシャツにきびしい魅見る

あの時の我慢で友情まだ続き

凶と出たみくじへ心正してる

翔ぶ鳥に空の広さは限りなし

美男美女七変化するカルタ取り

地球儀のこは飢えてる国思う

外国を旅して日本の良さを知り

四季のある国に生れて梅見頃

国境を越えた友情まだ続き

国平和売れる男性化粧品

文化国未だ捨てられぬ薬細工

国内ではもうあきたらぬハネムーン

博泉

聖地

有一

美佐子

百合子

雅洋

キヤニオン

野生

形水

入仙

好郎

武助報

佳生

民治郎

照江

白光子

富志子

勝晴

さよ子

ひで

射月芳

節子

操子

こう

秋子

希久志

世界人

道夫

加助

城北川柳会

川口弘生報

明治まだ希望あらたに初詣り

よろこびの泪もすこし塩辛い

一匹が釣れて煙草に火を付ける

母の愚痴そつと聞いている流し台

豪雪を想像出来ぬ日尚ほこ

想像に任せますわと片えくぼ

正月がすんだら元日の二人きり

負傷したゴキブリ逃がそ殺そうか

円満になったと云われて年感じ

人間の無能を笑う雪が降る

おはようの挨拶今日を元気づけ

円満にみえる家にもなやみあり

故郷からの小包歳を忘れさせ

北風をすき焼鍋で温める

たかが歩と踏んだと金に泣く王手

白雪に殺意がないのに人が死に

蟹すきの箸とめ昔の苦を想う

豆をまく声の聞える片田舎

片言の電話に母の耳ぬくい

大山の雪に驚く河内弁

川柳後楽

井上柳五郎報

泣き言を黙って聞くと義理のうち

泣き言が聞えぬふりの鞭もある

泣き言をホームヘルパー聞いてくれ

終電車熟柿の匂いも乗せている

こんたがあるのか大鉢についてくれ

この酒に酔うてはならぬ床柱

ご無礼をしたとは酒が許さない

なんのかの言うてらうちに酒となり

きくみ

満津子

弘

テルミ

としよ

右近

ふみ

道子

幸

寿郎

午郎

美恵

忠夫

なりこ

三十四

公一

千子

捷一

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

左春

お詫び

三月号「女性同人一句集」に掲載致し

ました西村早苗氏（鳥根県）は、れっき

とした男性です。お詫びして訂正します。

編集部

草風

葵丘

青銅

柳五郎

哲郎

博友

番茶

鯨虎狼

七面山

健一

静水

愛

房子

鬼焼

靖幸

蘭子

笑子

比呂子

鈍舟

敬子

不朽

不

朽

朽

朽

朽

夫として妻の一端を喰えない
一喝のあとには淋しい四面楚歌
北風に愛の尺度を試される
春の雨みんふくらむものばかり
一日のドラマがしずむ地平線
背を向けた亡父へ悔悟の鐘鳴らす
本当のことを雑談から拾い
マラソンを二日でやめた朝ねぼう
時間とまれでもすきでゆく川のように
こぼれないように野心のビール酌ぐ
南大阪川柳会 中川 滋雀報
パワある言葉は過去の足跡か
ワイワイガヤガヤ数で来るパワ
雑草のパワ一零下の土に生き
天狗の鼻は再び初心に戻れない

雅号ぶつちやけばなし

(198)

みつじよ



おおみち

大道美乙女

つまずいて初心にかえる「三日
毎日が初心と思う靴をはく
素裸になれば初心になれるかな
一日の嘘がたまつた歯を磨く
遊ばせておいて値上り待つ広場
親と子の広場を一つ持っている
号令のない広場には鳩遊ぶ
漬物の夢も見まじったジャルパツク
お土産はすぐきと決めて嵯峨野行く
妻が臥て漬物石に知る重さ
何一つ不足ないのが物足らず
ランク一つ落とせば気持楽になり
諦めて元の一から積み初め
一つ位と耳へささやくるい罪
冬の陽を豊かに貰う窓磨く

著 居 秀 水 里 香 政 己 かつ子 節 夫 一路 仁 昭 貞 子 滋 雀 智 子 凡 九 郎 恒 明

好 彦 郎 鎮 子 君 子 憲 祐 文 秋 弘 生 節 子 信 治 綾 珠 好 一 柳 安 子 智 慧 子 小 松 園 頂 留 子 優

(主婦 五十八歳)

広場から鳩しめ出した労働歌
川柳化粧櫓 植村客遊子報

政権は安泰庶民斬り捨てて
新幹線久方ぶりの富士に逢う
口笛が出る日の気嫌をうたぐられ
昨日より十歩増えたよ試歩の数
雪洞で命を分けたチヨコレット
雑種でもここまで仕込んだ犬の芸
ガラス張り私の逃げた場所がない
古稀迎え人生の春風ぬける
数の子へ今年は妻も箸運び
海からの風を福茶であたためる
実物によく似たものにだまされる
その人へ銭入れたして赤電話

柳 仲 紅 月 秋 月 岳 詩 葉 香 奮 男 実 山 永 樂 大 鷹 秋 峰 拍 秋 客 遊 子 史 好 報

どんぐり川柳会 谷 垣
解決は急がず根雪のとけを待つ
はけ口がある渦潮の下真中
福笹に吊るサイコロはゆるさるる
田満な解決一歩ずつ下がり
サイコロを振るとき無神論は消え
はけ口が酒ですむなら知れている
パタバタとはたき はけ口求めてる
サイコロに切るとカレが煮えつまる
賽ころは雪になった青い豆がつかず
はけ口がなく未だ青い豆でいる
はけ口のないのに困る天下り
はけ口へこんな真面目な顔でくる
ひと騒ぎさせた娘も嫁ぎゆき
未解決おんなの乳房ゆれている
サイコロも淋し藤純子がおらぬ

史 岳 克 薫 儀 万 小 松 園 柳 仲 鎮 彦 勝 美 雅 風 射 月 芳 鬼 遊 醉 々 憲 祐

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りまず。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

「職人」 江城修史選
「暴走」 横山一声選
「雨」 河井庸佑選
川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 正本 水客選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)

六月号発表表 (4月15日締切)

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。
字は楷書で新かなづかいにしてください。

「本心」 大工藤甲吉選
「倉」 川端柳子選
川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 正本 水客選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)

七月号発表表 (5月15日締切)

本社四月句会

日時 四月七日(火) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271-3935番
おはなし
兼題 「走る」 川村好郎
「腰」 金井文敏選
「野仏」 阿萬秋選
「宝石」 橘高薫風選
席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守
会費 三百円

★投句は句箋に一葉1句、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

5月の兼題 「快活」 「輪草」 「歌」

4月の常任理事会は2日5時から

定価 五百円(送料45円)
半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)
昭和五十六年三月二十五日印刷
昭和五十六年四月一日発行
編集人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
〒542 大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話 大阪(三三二)一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番
三和銀行心斎橋支店
普通預金口座番号・一〇二七八三

本社5月句会は7日(木)6時から

ショッピング・ゾーン
梅田 一番地
楽しいショッピングとくらしに
いこいをつくる
皆さまの
百貨店です



大阪梅田・本町定休
阪神
電話(06)346-1201(代)

肉体疲労時のVB₁₂補給に— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠・授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



◆編集後記◆

★四月馬鹿というのでは無い。谷垣史好さんの家が丸焼けになった。彼は寝てたのだが、出火に気付いたとき、先ず川柳塔の原稿はと意識が走ったと言う。そこで目が覚めたのである。★夜中ハツと目が覚めて、明日中に印刷所に入れなければならぬ原稿を頭をよぎり、また眠りに落ちる。

★明日のことを憂うる勿れでは編集は成り立たぬ。

★史好・鬼遊・酔々と私、揃いも揃って寝せている。殊に史好さんと私は長身ながら、ともに四十二キロそこそこの体重で、烈しい風の日などふわふわと安定性がなく、われながら頼りない。それがこの頃、四十四キロになって史好さんに水をあけた。

★獅子奮迅ならぬ猫奮迅の毎日です。

(薫)

★四月一日。エープリルフールまたは万愚節ともいう。四月馬鹿母より愚かなるはなし。火星前主宰岡本圭悟作品。七面鳥ひねもす怒り四月馬鹿。青玄主宰伊丹三樹彦作品。川柳作品では四月馬鹿うちでは笑いにすらならず(耕司)エープリルフールに生まれたのは事(朝来)。豊原瑞穂の国の選良諸公が、年から年中嘘ばかりついているのは、衆知の事実。増税せずはしないということ。善処するは罪ほろぼしに一年のうち一

日ぐらいは国民大衆も嘘をついてよろしいという日を選定、法案を提出したところ与野党満場一致で可決。日も四月一日に決定。なぜなら、お釈迦様の誕生日が四月八日。そこで一日は、まだお釈迦様でも気がつくめえということ。コレホン

(啓)

★テレビ視聴率と言うのが。どのように調査するのかが、それを調査する専門の会社があり、各テレビ局はそれに依存していることは、現在において信用できる確率のようだ。視聴率の高い番組は、一般的に興味ある内容で、かつて八時に銭湯が空くと言われた類いのものが多く、進歩的で硬質なものには少ないようである。川柳もそれに似たようなところがあって、内容のなと重く知的なものは、無視される傾向がある。川柳が大衆の詩であつても、皆に喜んでもらうために、十年一日の如く低俗な甘い作品をつくつていてよいものだ

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



ろうか。こゝらでじつくり考え、改めないことには、何時まで経つても文学として発展しそうでない。

(き)

★三月号の校正の合間に喫茶店でお喋りしていたら、突然、薫風さんが「おれ一・五キロ体重がふえたぞ」と云つたのではくは驚いた。ぼくと薫風さんは身長、体重ほぼ同じ。瘦せっぱちで眼鏡をかけていて、年齢も一つ違い、はたから見ると似ていると時々云わ

れるのだが。

★一三夫さん亡きあと編集長は殊のほか多忙で、普通なら瘦せて当然だろうに、聞けば、忙しいために夜の麻雀が減り、麻雀をしないから煙草の量が減る。それで肥えてきたんだと。

★ぼくは残念ながら麻雀も煙草もやらないから肥える方法がない。この分では、秋の同人総会の頃には、三人の体型は似ても似つかぬものになっているかもしれない。

(史)

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



菊正宗

料理がいきる
辛口の本格派

生酃辛口

きもとからくち



神戸・灘
菊正宗酒造株式会社